



高松丸亀町壱番街前ドーム広場

讃 樹 會

令和4年2月1日発行

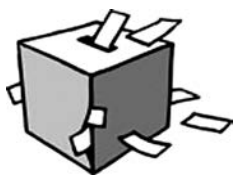
CONTENTS

- 02 第17回定期総会開催のご案内
- 03 会長選挙及び理事選挙のお知らせ
- 04 会長立候補所信表明
- 06 就任挨拶
- 11 同窓生教授就任挨拶
- 14 【寄稿】「母校出身、初の医学部長誕生に思う」
- 16 ニュースの窓
- 20 2021年度研究助成金/研究奨励金 受賞の言葉
- 21 研究助成金/研究奨励金2022年度募集要項
- 22 【特集】「医学部附属病院機能強化の取り組み」
- 26 【新シリーズ・私のキャリア】
- 28 関連病院紹介／香川県立中央病院
- 32 書籍紹介
- 33 支部会・懇親会
- 34 国外留学助成金留学レポート
- 36 学生支援（競争的資金）活動報告
- 38 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎
編集人 谷 丈二
印刷所 株式会社





令和4年度・5年度 会長選挙及び理事選挙のお知らせ

会長選挙

同窓会報62号（令和3年9月号）にて告示致しました会長選挙につきまして、立候補者が平川栄一郎氏のみとなりましたので信任投票を行います。立候補の所信表明及び推薦状はP4、P5をご確認下さい。投票用紙の信任・不信任のいずれかを○で囲み、同窓会事務局まで郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。

投票は締め切り厳守でお願いします。（3月31日午後5時必着）

総会当日に選挙管理委員会が集計結果をご報告いたします。（5月14日14：30～15：20）

理事選挙

同様に会報にて告示致しました理事選挙につき、会員のみなさまから次年度理事候補を卒年単位でご推薦いただきました。上位に推薦されました会員が次年度の理事候補者となっていますので（同封の理事選挙用紙をご確認下さい）、信任投票をお願い致します。

理事選挙の信任投票につきましては、

信任の場合は記入せず、不信任の場合のみ「×」を記入下さい。

こちらも同様に、同窓会事務局まで郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。

（3月31日午後5時必着）

選挙管理委員会委員長 植村信久

《《 投票方法と各種書類の返送について 》》

- ① 会長選挙投票用紙（ピンク）に記名する。
- ② 理事選挙用紙に記名し、不信任の場合だけ「×」を記入する。
- ③ 出欠確認書に必要事項を記入し、委任状に記名する。
（出席の場合は委任状の記入は不要です。）
- ④ 記念講演会に参加の場合は申込書に記入し、切り離す。
（FAX、メールでも申込可）
- ⑤ ①～④を返信用封筒で返信下さい。

投票の返信締切
3月31日（木）午後5時

讃樹會会長立候補所信表明

平川栄一郎（昭和61年卒・1期生）

讃樹會会員の皆さまにおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、令和4年度、5年度讃樹會会長選挙にあたり、多くの先生方からのご推薦を受けましたので、会長選挙に立候補し所信を表明させていただきます。

讃樹會は昭和61年に第1期生卒業と同時に結成され、本年を以て36年目を迎えます。昨年秋、笥善行先生が香川大学学長として就任二期目を迎えられ、医学部長には母校出身で神経機能形態学教授の三木崇範先生、附属病院長には門脇則光先生が就任されました。ご就任を心よりお喜び申し上げます。今回、医学部長に同窓会出身者が就任したことは勿論初めての事です。私は常々、讃樹會は全国で活躍する4000名余の同窓生の為であり、そのための活動であると考えていますが、それには母校の発展なくして同窓会の発展はないと考えております。母校の教授である特別役員の先生方からのご意見をいただき、大学執行部と緊密に連携をとりながら協力できる課題に対して迅速に対応して参りたいと思います。

医療を取り巻く状況は国の働き方改革による医師の勤務環境の変化や臨床研修制度などによる地域における医師数の偏在、分野別による偏在が問題となっており、香川県においても必要医師数の確保が喫緊の課題となっています。讃樹會には事業局、広報局、学術局、教育研修支援局（内科系、外科系、地域医療）があり、それぞれを担当する先生方を中心に同窓会活動を行ってきましたが、これまでも増して大学との連携や地域医療に関する課題に対応していく必要があります。そのため、現在複数名いる副会長に大学及び学術、地域医療、広報、行政及び法人化といった役割分担をしていただき、連携強化を進めて参ります。讃樹會の法人化については問題点を集約したところですが、本同窓会程度の規模であれば法人化を急ぐ必要はないようです。しかしながら、法人化問題につきま

しては讃樹會の将来構想につながるもので、副会長を中心に引き続き検討して参ります。また、コロナ禍等により、準会員である在学生への教育補助や留学のための援助金、卒後研修生のための補助金などについては縮小あるいは中断している事業があります。一方、全国の同窓生にも利用していただいている学術助成金や学会助成金などは昨年度とほぼ同額の決算となっていますが、コロナ禍の今なにができるかということについて学術局や教育研修支援局などでさらに検討し機能強化をはかっていきます。











これまでも讃樹會は活動事業として支部・同期会費を計上し、全国の同窓生のために支部会の充実を図り会員相互のネットワークづくりと同窓生の住所把握率の向上に努めてきました。昨年末、関東支部会長の内山順造先生がZoomを利用して関東支部会を開催しましたが、関東在住の大勢の同窓生が参加され、非常に盛況であったと聞いております。コロナ禍の中で、また新たなオミクロン株の流行の中で、支部会の開催は頭を悩ませる問題だと思えます。そこで、讃樹會が使用しているWebexを用いたweb会議を全国の支部会の開催などに利用していただこうと考えております。このシステムを利用して讃樹會事務局が会員への連絡等のサポートを行えば、各支部におけるwebによる支部会等の開催の労力を負担軽減できると思えます。

最後に、母校に誇りをもち、全国で活躍する同窓生を応援する讃樹會を実現していくために、皆さま方のお力が必要不可欠と思っております。微力ではございますが、執行部、理事会、そして讃樹會会員の皆さま方のご指導を賜りながら、身近で頼れる同窓会となるように尽力していく所存です。

推薦状

令和4年度・5年度香川大学医学部医学科同窓会、讃樹會会長
選挙に 1期生 平川栄一郎 君を推薦します。

推薦人

- (1)期生、(S61)年卒 大西 宏明 
- (1)期生、(S61)年卒 大森 浩二 
- (1)期生、(S61)年卒 遠平 龍七郎 
- (5)期生、(H2)年卒 星川 宏史 
- (5)期生、(H2)年卒 羽内 礼次 
- (6)期生、(H3)年卒 日下 隆 
- (6)期生、(H3)年卒 志木 宗記 
- (7)期生、(H4)年卒 木下 博之 
- (8)期生、(H5)年卒 西山 成 
- (10)期生、(H7)年卒 中村 文洋 



就任挨拶

医学部長就任のご挨拶

さらなる高みを目指す



香川大学医学部長 三木 崇範

(平成3年卒・6期生)

新年あけましておめでとうございます。

令和3年10月1日付で医学部長を拝命しました。香川医科大学・香川大学を通じて初めて母校出身の医学部長となりました。医学部の舵取り役としての医学部長の責任の重さに身の引き締まる思いであります。この場をお借りして讃樹會会員の皆様にご挨拶申し上げます。

はじめに、簡単に自己紹介させていただきます。平成3年に香川医科大学を卒業し、すぐに第一解剖学(竹内義喜名誉教授)の大学院生となりました。平成7年大学院修了後は第一解剖学の助手として基礎医学研究の途に就きました。3年間のオーストラリア留学、准教授を経て、平成24年に神経機能形態学(旧第一解剖学)の教授となりました。副医学部長を経験後、令和3年10月から医学部長を拝命しました。香川医科大学入学から今日までの37年間母校に身を置いていることになります。解剖学の教育と発達神経科学を研究分野として参りました。

この度、同窓の先生方をはじめ多くの先生方のサポートのおかげで医学部長の任に就きました。私自身は、出世欲や名誉欲とは無縁で、唯々学生と将来の大学の為に今できることをしたいという思いでこの職に立候補しました。同窓が力を合わせて香川大学医学部をもっと躍動させたいと考えました。幸いなことに、同じ考えを持つ同窓の助けがありました。特に、同級生の日下隆教授(小児科学)の絶大なサポートは格別でした。日下教授とは、予備校の時から友人で同じ年に教授に昇格しました。研究はもとより、何をするにも相談してやってきました。同じく同窓の木下博之教授(法医学)も、法医学の多忙な業務のなか協力したいと申し出てくれました。このような友人-まさに同志に恵まれた身の上に感謝しかありません。私たちは、同窓の代表として、大学の為に私に背して貢献することをお約束致します。個人的には、医学部長として、先見の明とバランス感覚を以て、相手の気持ちを慮って事を前に進めていく所存です。執行部副医学部長には、同窓の日下教授と木下教授に加え、桑原知己教授(分子微生物学)、藤原祐一郎教授(分子生理学)、谷本公重教授(小児看護学)、竹森元彦教授(心理療法実践学)、中島一浩様(事務部長)の7名の協力を

得て、盤石な教育・研究・運営体制を敷いて参ります。香川大学医学部は、医学科、看護学科、臨床心理学科の3学科を擁する医療系学部となっています。3学科が連携することを宗として、地方にありながらも尖った特徴を有する香川大学医学部を目指して参ります。どうか讃樹會同窓の先生方のご支援をお願い申し上げます。

同窓の先生方には、教育、研究、運営のうち、教育についての私の想いを知って頂きたく、ご紹介させていただきます。大学の教育は、自らが学生時代に受けてきた教育を基盤として、卒後の教員としてのキャリアのなかで経験したり、見聞きしたスタイルのうち、自己の感性にぴったりフィットしたものが付加されて、その人独自の教育に対する哲学が生まれると考えています。私は香川医科大学の6期生です。当時の香川医科大学は、待ちに待った6期生の入学で乗組員全員が揃って、大海原を航海する大型帆船のようでした。当時の先生方も上級生も私たち6期生の入学を待ち遠しく感じていた想いが強く伝わってきていました。それだけに、私たちが受けた教育はどの教科をとっても先生方の熱意が籠っていたように思います。先生方は皆一生懸命であったのです。そのためか、厳しく難しい科目やユニークな講義スタイルの科目が数多くありました。それに洗礼を受けることになった私達は、厳しさの故に顎を出すこともありました。しかし、そこには学生に対する愛情が溢れていました。これを今振り返って、難しかったけれども一生懸命取り組んで及第点を取ったという達成感を口にすることはあっても、あれは今役に立ってないから習わなかった方がよかったという同窓は皆無です。困難に抗いながらこのような経験をした私たちは、後輩にも是非とも同様の教育を受けさせてやりたいと常々思ってきました。しかしながら、思っただけでは実践できる立場になければ困難なことでした。ところが機が熟してそれがいま可能になりました。私たちが受けた教育のスピリット・薫風を次世代の学生に伝えることが可能になったわけです。

学生には、創成期の私達同窓が経験したように、自由な学風の中で、個性豊かで多様な学生が学ぶ学生生活を提供したいと考えています。いま、香川大学医学

部の医学教育の方針をシフトしようと動き始めました。香川大学をこれまで以上に躍動させ、自由で未来明るい大学にし、優秀な人材を輩出する為です。私の方針として、1) 医学生としての道徳観や倫理観の育成 2) 自ら学び物事の理(ことわり)に迫る学修姿勢 3) 国際人としての資質の涵養 に重きを置き、個々の学生の自主性や興味関心に応え探求心を満たす教育を実践していくために先導していく所存です。学生には、6年間に自分が歩んできた道を振り返った時、舗装さ

れた歩きやすい道ではなく、歩き難くもその足跡が明確に残る砂浜を歩いてきたような学生生活を送ってもらいたいと願っています。このような姿勢で医学教育に取り組んでいきます。すぐに教育効果が現れるものではありませんが、志を同じくする先生方と共に取り組んでいく所存です。

さいごに、讃樹會会員の先生方の御健勝を祈念し、御挨拶の結びとさせていただきます。

病院長就任のご挨拶

香川大学医学部附属病院の発展に向けて



香川大学医学部附属病院長

門脇 則光

2021年（令和3年）10月1日付で、田宮前病院長の後任として、香川大学医学部附属病院長を拝命しました。就任に伴い、讃樹會会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は2015年（平成27年）4月に香川大学血液・免疫・呼吸器内科（旧第一内科）に着任し、血液内科医として血液疾患の診療・研究・教育にあたりるとともに、膠原病・リウマチ内科、呼吸器内科を含めた講座全体の運営に携わってまいりました。このたび、病院経営、医師確保、地域医療連携、働き方改革、新型コロナウイルス感染症と諸事多難な折に病院長に就任し、まさに身の引き締まる思いです。これらの課題に対し、杉元幹史（診療・医療安全担当）、辻 晃仁（研究担当）、堀井泰浩（経営・評価担当）、金西賢治（教育・地域連携担当）、富山清江（看護部長、医療の質管理担当）、中島一浩（事務部長、総務担当）副病院長という強力な布陣で臨みます。

就任以来、学内のいろいろな部署の皆さんや、香川県内のさまざまな医療機関の先生方とお話をする中で、学内に克服すべき多くの課題があること、県内医療機関のニーズを満たすためには多くの若手医師に香川県で働いてもらう必要があることをひしひしと感じています。

学内の課題とは、病院経営、人員不足、長時間労働、研修医確保、女性医師が働きやすい環境作りなど多岐にわたります。病院経営については、病院再開発で背負った多額の借入金を返済し、一方で必要な人員の確保や医療機器の更新を進めるために利益を捻出する必要があります。そのために、まず手術部や麻酔科と協力して手術件数を増やすべく策を打ち出していますが、今後さらにそれ以外の分野の診療も拡大すべく、問題を洗い出しています。このように診療を拡大するために、特定看護師などの養成によるタスクシフティングの促進や医療事務作業補助者の雇用といった医師を支えるしくみを整えるとともに、これまでの慣行を見直して会議や手続きの簡略化を図っています。これらによって、医師が本来の業務に注力できる環境作りを目指しています。さらに、患者さんをできるだけ多く紹介していただくために、地域医療機関との連携やコミュニケーションを密にするとともに、広報活動を充実させて香川大学を強くアピールすることを試みています。

これからの香川県の医療を支える若い医師を増やすためには、本学の学生を惹きつけ、香川大学そして香

川県に数多くの研修医をリクルートする必要があります。大学のスタッフは学生にアピールするさまざまな機会が多いのに香川県に残る人が最近多くないのはどこに原因があるのか、三木医学部長や卒後臨床研修センターとともに検討を重ね、方策を練っています。また、県内医療機関の先生方とお話するにつけ、今後は専門医のみならず、複数の問題を抱えた高齢の患者さんなどの診療に長けた総合診療医を育成することが重要であると痛感しています。この分野を香川大学で一層強化していきたいと思えます。

以上のようなさまざまな課題の克服とともに、大学病院たるゆえんである高度医療、治験、臨床研究を推進してまいります。各科がそれぞれの分野で特色を出し、高度医療や研究面でvisibleになることが、香川大学の地位を高め、若い人や地域の人にとって魅力を増し、職員もプライドを持てる源になると思えます。これを推進するためにも、先に述べたように医師が本来の業務に専念できる環境を整えることが重要になります。

もう2年間にもわたって波状攻撃を続けている新型コロナウイルス感染症に対して、本学は香川県や県内医療機関と連携して取り組み、重症患者さんや妊娠中の患者さんを受け入れて、「最後の砦」としての役割を果たしてきました。また、新型コロナ勃発を機に感染症診療を充実させなければという気運が急速に高まったことを受けて、香川県の委託事業として2021年（令和3年）4月に感染症教育センターを設置し、香川県立中央病院から横田恭子先生が着任して、感染症専門医、感染管理認定看護師の育成を図るとともに、県内医療機関の感染症診療のリテラシーを向上させることを目指しています。

当院のキャッチフレーズ「ささえる、つながる、リードする」のもと香川大学医学部附属病院が輝き、発展することが、香川県内のみならず全国各地で活躍されている同窓の先生方の励みになると存じます。それを目指して職務に邁進する所存です。今後ともご支援、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

教授就任にあたって

－香川大学で看護師・助産師を育てる－



香川大学医学部医学科健康科学 教授

塩田 敦子

令和3年4月より香川大学医学部医学科健康科学の四代目教授を拝命し、任に就いております塩田敦子でございます。どうぞよろしく願いいたします。

竹内博明教授から、平峯千春教授、峠 哲男教授と引き継がれてまいりました健康科学講座は、看護学科での学部教育、大学院教育の一端を担う医学系の教室です。主に「人体の構造と機能」および「疾病の成り立ちと回復の促進」について臨床経験をもとに講義を行うほか、看護研究や院生の指導、また本学にて全学共通科目も担当しています。香川県立保健医療大学でも8年半、看護・助産・臨床検査の教育に関わってまいりましたが、こちらにきて新しいことも多く、講義の準備や学生の相談に追われているうちあっという間に9カ月が過ぎ新しい年を迎えました。来年度からはもっと余裕をもって学生たちに、知識ばかりでなく、医療という特別な仕事に携われることの誇りや喜び、そして命に対する畏怖の念など伝えていけたらと思っています。

私は三重県の伊勢市と松阪市の間にある漁師町で生まれました。子どもの頃から漠然と人の役に立ちたいと医師を目指しましたが、京都で浪人生活を送った後医学部受験に再度敗れ早稲田大学教育学部に入学しました。もう一回だけ挑戦してみたいとの思いで1年在学中に東京医科歯科大学を受験したところ思いもかけず合格し、神様が「医者になって人様の役に立つ使命を持ってますよ」とおっしゃっていると勘違いしてしまい、今に至ります。卒業後2年間母校の産婦人科で研修の後、香川県出身の早稲田の先輩と結婚し、平成元年香川大学（旧香川医科大学）母子科学講座に入局いたしました。20年以上在籍し准教授も務めさせていただいた後、平成24年10月香川県立保健医療大学看護学科の教授となりましたが、附属病院女性外来診療部の診察協力医師として診療を続け、非常勤講師として医学科、看護学科の講義を行ってきました。初めて香川に来た日から30年が過ぎ、産婦人科医師として育ててもらった香川大学は、私にとって母校そのものであり、恩返しをさせていただきたいとの思いでいっぱいです。卒業年からは香川医科大学2期生にあたります。

私のここ20年来一貫した思いは、女性をまるごと支えたい、ということです。女性はいのちを縦にも横にも繋ぐ存在であり、女性の笑顔には家庭、職場ばかりか社会を明るくする力があります。分娩、月経を考えるとわかるように、女性は「待つ」、「痛む」ということを元来、家族、地域のなかで自然に行ってきたのだと思いますが、女性ホルモンのリズムを内在する女性

にとって、情報過多で忙しく不寛容な現代は生きにくい時代です。月経にまつわる症状、妊娠褥婦のメンタルヘルス、不妊の悩み、子育て、更年期障害、慢性疼痛……。たくさんの役割をこなし頑張りすぎて不調に悩む女性たちをエンパワーメントすることが、教育でも、研究でも、診療でも、そして地域貢献でも私のテーマとなっています。そのためのツールのひとつとして私が手に入れたのが「漢方」です。「心身一如」の漢方薬は症状のもとになったバランスの崩れを整えて自己治癒力を高めるので、自分の心身への信頼感を取り戻し、女性であることを肯定的にとらえてもらえるのにも役に立ちます。指導医として専攻医も育てていますが、漢方の全人的医療の考え方は看護に大いに活かせます。五感を使うフィジカルアセスメントを知れば根拠を持った看護ができますし、チーム医療の側面からも、患者に最も近い看護師が漢方を理解し、効果、副作用を知ることが漢方薬のコンプライアンスを高め、効き目をも高めることとなります。平成26年度に、「看護師教育における漢方教育のあり方」の課題で科研費を獲得し研究、教育資材を開発、実践しております。

学部教育だけでなく、看護学科では令和2年度より大学院助産学コースができており、今年度春には博士後期課程が、令和5年度からは保健師養成コースも開設される予定です。看護の倫理的ジレンマや疑問、違和感から課題をみつけ研究できる、専門的知識と幅広い人間力を持った助産師、看護学修士・博士の育成にも尽くしたいと思います。看護職は処方できません。でも、どんな薬よりも希望を繋いでくれるチカラを持つ「言葉」と「手当て」を処方できる、想像力とエンパシーを持つ看護師、助産師を育てる、そのためにも漢方を教えたいと思っています。

私にとりまして香川大学でのこれからの4年間は、香川の女性たちのために、香川大学のために、「還元」していくことが使命であると考えています。「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」とはジェラール・シャンドリの言葉ですが、香川大学の諸先輩方や患者さんからももらった知識や思いを、時間や気持ちを惜しまず、上機嫌で全力で、学生さん、若い世代の医師、看護師、助産師、地域の方々に「与える」、「伝える」作業をしたいと思っています。讃樹會会員の先生方には今後とも一層のご指導、ご鞭撻をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

（ご略歴を次ページに掲載させていただいています（広報局））

略歴

昭和62年3月 東京医科歯科大学医学部医学科卒業
昭和62年6月 東京医科歯科大学医学部附属病院 研修医（産科婦人科）
平成元年5月 香川医科大学医学部附属病院 医員（産科婦人科）
平成元年9月 香川医科大学助手 医学部附属病院（産科婦人科）
平成5年4月 香川県立がん検診センター 婦人科医師
平成8年7月 香川県立がん検診センター婦人科医長
平成8年10月 香川医科大学助手 医学部（産科婦人科学）
平成15年4月 香川医科大学講師 医学部附属病院（産科婦人科）
平成15年10月 香川大学講師 医学部附属病院（産科婦人科）（統合にて名称変更のため）
平成18年12月～平成24年9月 香川大学医学部附属病院女性外来診療部副部長
平成19年10月 香川大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター 准教授
平成23年4月 香川大学医学研究院 准教授（周産期学婦人科学）
平成24年10月 香川県立保健医療大学 保健医療学部看護学科 大学院保健医療学研究科 教授
令和3年4月 香川大学医学部医学科健康科学 医学系研究科看護医科学 教授

同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって



香川大学医学部
消化器外科学 教授

岡野 圭一（平成4年卒・7期生）

2021年9月1日より、香川大学医学部消化器外科学の教授を拝命いたしました。讃樹會の皆様には、これまで多くのご支援を頂き、心より感謝申し上げます。

我々の講座は、1980年に田中聰先生が初代教授となり開設された香川医科大学外科学講座第一外科学を母体とし、その後2006年の講座再編により香川大学消化器外科学となり、鈴木康之前教授から私がバトンを引き継ぐこととなりました。開講以来ほぼ40年目にして、初めて本学の卒業生として教室を主宰させていただくことを、光栄に思うと共に厳粛に受け止めています。このことは、これまで本学や教室を支えてこられた諸先輩や仲間が積み重ねてきた努力が、学内外の多くの方に認められたのだと身をもって感じています。

私は愛媛県出身で松山東高校を卒業して、1986年に香川医科大学に入学しました。大学生活は多くの友人にも恵まれ、様々な経験を積み大変有意義なものとなり、勉強以外にも剣道や音楽・旅などで充実した時を過ごしました。特に西医体の時期に剣道の練習で汗を流した後に、部活の仲間と庵治の海で泳いだ日々は私にとって忘れられない大切な思い出です。今でも学生時代の友人との繋がりは心の支えとなっています。

大学卒業後は、ポリクリでの経験や教室の雰囲気から惹かれ、第一外科に入局しました。“人を育てる”ことを最も大切にされ、厳格でありながら人間的な魅力を持たれた田中聰先生の薫陶を受けたことは、その後の私の外科医としての生き方に、大きな影響を与えました。また、学生時代に読んだ柳田邦男氏の“ガン回廊の朝”という本に惹かれ、1996年からは国立がんセンター中央病院にレジデントとして行かせて頂きました。全国から集まった外科医たちが、切磋琢磨しながら、精緻な手術でがんを治そうと情熱を燃やしていました。そこで指導していただいた先生方との出会いは、その後の成長への大きなエネルギーとなりました。レジデントを終えた後は香川へ戻り、気が付けば本当に長い間、母校で診療・教育・研究にあたってきました。瞬く間に時は過ぎましたが、振り返って考えると、最先端の医療を行える場所が大学であったという事だけではなく、やはり教育が好きだったのだと感じています。

私は、この度の教授選考プレゼンテーションの最後のスライドに、本学の図書館の裏にある小さな石碑の写真を用いました。その石碑には、本学初代学長砂田輝武先生による“感謝の心”というシンプルで力強い言葉が刻まれています。砂田先生は心臓血管外科医であり、剣道の達人でもあったそうです。砂田先生は、入

学生にいつも“人の気持ちや苦しみをを感じる心、思いやりの心を持つ事”、“常に感謝の気持ちを持つ事”を伝えていたそうです。大きく価値観が変化するこの時代においてこそ、決して忘れてはならない重要なことだと思います。この建学の思いを引き継ぎ、良医を育成して医学の発展に尽くすことが私の責務であると思っています。

我々の診療を紹介させていただきます。消化器外科の診療領域は多岐にわたりますが、特に大学病院として難治がん治療、低侵襲外科治療、移植医療に重点を置いています。

がん治療においては、がんゲノム医療拠点病院の一つとして他科の専門医との連携をもとに手術を軸とした最新の集学的治療を行っています。難治がんの代表格である膵がんをはじめとする肝胆膵領域がん・食道がん・直腸がんに関しては、治療成績向上のために集約化と新規治療の開発が重要であると考えています。特に我々が開発した膵がん術前治療プロトコール（Ann Surg Oncol 2017）の成績は、国際的にも高い評価を受けています。

低侵襲外科手術の分野では、上部・下部消化管・肝胆膵領域における日本内視鏡外科学会技術認定医を中心に積極的に鏡視下手術にも取り組み、安定した成績を残しています。ロボット支援手術を含めたこの領域は、AIや5Gなどの技術革新と連携させることにより、今後の大きな飛躍が期待されると考えていますので、着実に進めてまいります。

移植医療に関しては、全国で18施設・四国では唯一の脳死下腎移植認定施設として積極的に取り組み、移植後の生存・臓器生着率に関しても良好な実績を残しています。膵移植を受けられる方には若い女性が多く、移植により低血糖発作や透析から解放され、その方の人生が大きく変わることを見ると、移植医療の大切さを実感します。提供者やそのご家族の思いに応えるためにも、しっかりと継続していきたいと考えています。

香川大学医学部も歴史を積み重ね、多くの卒業生が全国で活躍し、学内においても重要な役割を担い、成熟の時を迎えようとしています。これからが更に重要な時期であり、建学の思いを胸に、力を合わせて次の世代に繋げていきたいと考えています。若手の先生方へのメッセージとして、“人との出会いは自身の成長

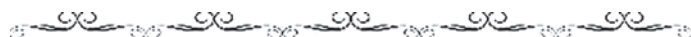
につながる”ので大切にしてほしいことと、“一つの事をあきらめることなく継続していく”ことが新しい世界を切り開きますので頑張ってください。

大学外科学講座の最も重要な役割は人材育成と考えています。我々の教室は、伝統的に温かい雰囲気の中で大切に“人を育てる”ことを行ってきました。私はこれからも一人一人の多様性を認め、包容力のある教室において“信頼される外科医”を育成してまいります。香川で、共に手術で患者の命を救っていく仲間を求めています。いつでもご連絡ください！

(okano.keiichi@kagawa-u.ac.jp)

略歴

平成4年3月 香川医科大学医学部卒業
 平成4年4月 香川医科大学外科学講座第一外科学入局
 平成8年3月 香川医科大学大学院医学研究科博士課程修了
 平成8年6月 国立がんセンター中央病院外科レジデント
 平成11年6月 香川医科大学外科学講座第一外科学 助手
 平成14年9月 米国 Case Western Reserve University, Research fellow
 平成16年9月 香川大学医学部外科学講座第一外科学 助手
 平成20年4月 香川大学医学部消化器外科学 講師
 平成22年4月 香川大学医学部消化器外科学 准教授
 令和3年9月 香川大学医学部消化器外科学 教授



教授就任にあたって

～楽しそうにしておく～

東京女子医科大学附属八千代医療センター
 泌尿器科 教授

乾 政志 (平成4年卒・7期生)

こんにちは。7期生の乾です。ご報告が遅くなりましたが、2020年12月24日付で東京女子医科大学附属八千代医療センター泌尿器科教授に就任しました。当院は病床数501の東京女子医大の分院で、人口20万人の千葉県八千代市にあります。八千代市の人口は多くはありませんが、千葉市、船橋市と隣接しており、カバーする医療圏は千葉県の人口の1/3が集中する人口過密圏です。マスコミ報道では評判のよろしくなかった(マスコミ恐るべしです 笑) 女子医大ですが、病院のスタッフは大変優秀で、仕事熱心な方が多く、いつも助けられています。

さて、話は昔に戻りますが、大学時代はグリーンハイツ(最近、残念ながらもなくなったと聞きました)102号室で過ごしました。このアパートは私が入学時に新築であったことから住人はほとんど同級生で、非常に賑やかなアパートでした。そのつながりは卒業後も続いており、今でも定期的に同窓会を開催しています。サークルは軽音楽部に所属しており、卒業までバンドに明け暮れ、またバイクやサーフィンなど大いに学生生活をエンジョイしました。卒業後は香川医科大学泌尿器科学教室に入局し、大学病院で2011年までお世話になりました。その間、同窓会事務局でもお手伝いをさせて戴き、皆様には大変お世話になりました。専門医を取ったばかりの私の我儘をきいて国内留学に送り出していただいた初代泌尿器科教授の竹中生昌先生、そして香川大学で腎移植プログラムの立ち上げなど多くの学びの機会を与えていただいた、前泌尿器科教授の笥 善行学長には大変お世話になりました。大学入学から約4半世紀を香川で過ごし、入局当初は「三木町に骨を埋める覚悟」でありましたが、一念発

起して家族全員で住み慣れた香川を後にしました。

2012年4月から東京女子医大泌尿器科に異動し、腎移植に加えて、ロボット支援手術の経験を積んだ後、2013年5月に泌尿器科診療科長・准教授として当院に赴任しました。完全アウェーの中、泌尿器科スタッフ及び関係各所の協力を得て、翌年7月には女子医大の分院としては初めての腎移植を開始できました。当初は中々症例数も増えませんでした。一昨年位から紹介も増え、昨年7月によりやく累計100例を達成しました。ここ数年は年間30件程度の腎移植を実施しており、全国でも上位の実施件数で、県内の基幹施設として浸透してきた気がします。また、ロボット支援手術では高い買い物であるダヴィンチの導入に管理者の了解を得る事に時間を要しましたが、2016年10月から開始、前立腺癌、腎癌、膀胱癌、腎盂形成術など症例を



筆者 右から2人目

重ね、今年9月で漸く累計300例を達成しました。現在、泌尿器科スタッフは私を含め5名と少人数ですが、みんなの協力で、臨床ベースで積み上げた実績により、教授の称号を頂きました。

教授に就任して1年になりますが、相変わらず診療に追われる毎日ですが、つい先日、ある同級生から「上のは楽しそうにしておいた方が良さぞ」とアドバイスをもらい「なるほどな」と良い意味で力が抜けました。私に残された時間と能力には限りがありますが、「楽しそうに」働きながら、今後の地域医療を支える泌尿器科医の育成、なかでも腎移植を担っている人材の育成に力を入れていく所存です。よろしくお願ひ申し上げます。

略歴

H 4年 3月	香川医科大学医学部医学科卒業
H 4年 4月	香川医科大学泌尿器科学教室入局
H 8年 3月	香川医科大学大学院生体制御系生体情報部門修了
H 10年 4月	東京女子医科大学泌尿器科助手
H 13年 5月	香川医科大学医学部附属病院泌尿器科助手
H 16年 4月	香川大学医学部附属病院泌尿器科講師
H 24年 4月	東京女子医科大学泌尿器科講師
H 25年 5月	東京女子医科大学八千代医療センター泌尿器科准教授・診療科長
H 29年 11月	同 臨床教授
R 2年 12月	現職

寄稿

母校出身、初の医学部長誕生に思う

讃樹會名誉会長
濱本 龍七郎 (昭和61年卒・1期生)



皆様 新年明けましておめでとうございます。

今、医学部長室で、2021年10月より就任された三木医学部長を訪問し、談笑している。夢芝居であろうか、いや、夢ではない、現実である。自分の右頬をつねってみて、やはり痛かった。目の前にいるのは、母校6期生の三木崇範先生である。先生の会話の中で、自分が入学した時、丁度一期生が6年、これでやっとすべての学年が揃ったと。そう言われてみると、私なんかは、あまりそう意識がなく、入学後、一年ずつ上へあがって行き、あまり後輩に対する意識はなく、ひたすら初めて与えられた授業、テストをこなし、基礎実習、実験をこなし、ポリクリをこなし、卒業試験をこなし、初の国家試験をこなし、初の卒業式をこなし、初の卒業生を迎える各医局の争奪合戦に屈して、1986年、入局したような学年である。

しかし卒業した時、医局にはそれを支える他大学出身の先生達がいた。我々は先輩がいなかったため、本当の先輩に教えるを乞うた事がない。それも唯一不思議な学年であり、また奇跡の学年である。しかし、後輩には恵まれていた。ただただわけも分からず前に進むだけであった。卒業してすぐ、医学部医学科同窓会を設立し、10年、20年、30年と時は進み、平成19年(2007年)、初の母校出身教授が就任、今や18人

もの母校出身教授が誕生している(大学院を含む)。

医学部長といえば、私が入学して香川医科大学副学長教育担当、当時は西田副学長、後の二代目学長であり、雲の上の人である。三木医学部長と2021年10月就任時、二人で学部長室で会話していることは、この上ない至福の時であり、よくもここまで来た感慨深く涙が出るほど嬉しく思った。

香川医科大学は平成15年(2003年)、香川大学と統合し、6分の1学部となった。学長は、医科大学の学長から、総合大学の学長となった。浜松医科大学、滋



医学部長室にて三木先生(右)と

賀医科大学は統合せず、医科大学を貫いたが、さて、統合した医科大学と統合しなかった医科大学とどちらが選択としてよかったか、いまだにわからない。今後、人口減少に伴い、一県一医大構想から、四国の統合さえ言われている。そうなると、四国で香川大学医学部がリーダーシップをとれるのかどうか、卒業生としては非常に心を痛める所である。

2021年は、コロナのパンデミックに見舞われ、全国民がwithコロナの生活を強いられた社会状況であった。特に医療従事者に課せられた任務は多大なる負担をもたらし、精神的・肉体的に疲弊した。また、国政は、安倍総理から菅総理、そして岸田総理に代わり、コロナ対策、経済対策、社会保障対策、少子高齢化対策等、問題は山積している。それでも、同年夏には、コロナ禍の中、「小さな五輪をレガシーに」のメッセージを出し、東京オリンピックが開催され、世界で活躍したMLB二刀流の大谷翔平選手、ゴルフの松山英樹選手には心が癒された。

香川大学は、寛善行学長が10月より二期目を迎えられ、医学部は三木崇範医学部長、門脇則光病院長が就任され、医学部を牽引することとなられた。

特に三木先生は、母校出身初の医学部長誕生で、卒業生にとっては、やっところんな時代がきたかと本当に記念すべき年となった。三木先生は、「崇」高な目標を持ち医師として模「範」になられる人柄である。おそらく御両親が、そういう思いで崇範と名付けられたのではと想像する所である。我々卒業生は、三木先生に今後の医学部の発展と斬新なる改革を期待しているところであり、また、それを実現していただける人物であると思っている。

会員の皆様には、是非是非、三木医学部長への応援、御指導御鞭撻を宜しくお願い申し上げ、名誉会長の挨拶とします。



ニュースの窓

組織・人事

2021年10月1日付のご就任をお知らせします。

【医学部執行部】

(敬称略)

役職	氏名	所属
医学部長	三木崇範 (6期生)	神経機能形態学
副医学部長 (医学科教育担当)	日下 隆 (6期生)	小児科学
副医学部長 (看護学科教育研究担当)	谷本公重	小児看護学
副医学部長 (臨床心理学科教育研究担当)	竹森元彦	心理療法実践学
副医学部長 (大学院教育及び研究担当)	藤原祐一郎	分子生理学
副医学部長 (入学試験担当)	桑原知己	分子微生物学
副医学部長 (評価・広報・社会連携担当)	木下博之 (7期生)	法医学
副医学部長 (総務担当)	中島一浩	事務部長

【医学部附属病院執行部】

役職	氏名	所属
病院長	門脇則光	血液・免疫・呼吸器内科学
副病院長 (診療・医療安全担当)	杉元幹史 (3期生)	泌尿器科学
副病院長 (研究担当)	辻 晃仁	臨床腫瘍学
副病院長 (経営・評価担当)	堀井泰浩	心臓血管外科学
副病院長 (教育・地域連携担当)	金西賢治 (8期生)	周産期学婦人科学
副病院長 (医療の質管理担当)	富山清江	看護部長
副病院長 (総務担当)	中島一浩	事務部長

医学科4年次生の臨床実習開始式が挙行されました

2021/12/20

共用試験 (CBT及びOSCE) に合格した医学科4年生を対象に、臨床実習開始式を実施いたしました。式では、初めに筧学長からご挨拶をいただきました。そして三木医学部長、門脇病院長の挨拶に続き、学年を代表して曾根晴人さんに三木医学部長からStudent Doctor認定証を、門脇病院長から白衣がそれぞれ贈呈されました。

1月からは新型コロナウイルス感染拡大防止にも留意しつつStudent Doctorとして附属病院及び香川県内の医療機関等での医療現場で臨床実習を行うこととなります。患者さんのご協力により成り立っている実習であることを肝に銘じ、これまでに学んだ医学知識を十分に活かし医療の基本的技術を習得するとともに医師としての態度を真摯に学んで頂きたいと思っております。

(医学科長 日下 隆)



左から門脇病院長、学年代表 曾根晴人さん、
筧学長、三木医学部長

香川大学医学部附属病院 卒後臨床研修 —コロナ禍における医師臨床研修—

香川大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター

安田 真之

私は2020年5月より、長らく香川大学医学部附属病院、卒後臨床研修センターで臨床研修の勧誘、教育の最前線でご活躍された松原修司先生の後任として当センター専任医師を拝命しました。平素より讃樹會会員の皆様におかれましては、当センターの活動にご理解とご協力を賜り、この場をお借りして御礼申し上げます。

2004年度より開始された医師臨床研修制度も17年が経過しました。2020年度には2回目の制度改正がなされ、必修7科目の復活、外来研修の義務化、評価方法の変更など多くの変化に対応する年となりました。また2020年4月には新型コロナウイルス感染症拡大に対して全国に緊急事態宣言が発令され、都市部の医師臨床研修プログラムにおいて県外移動を伴う協力型病院での研修が困難になる事例も聞いております。幸い、当卒後臨床研修センターにおける研修プログラムでは協力型病院の皆様のご理解とご協力により、研修プログラムへの影響はほとんど発生せず、順調に研修が行われております。

しかしながら例年開催していた懇親会などの多くの行事が中止になったり、研修先での歓迎会等も開催ができなかったりと、以前とは異なるコミュニケーションが求められています。なかなか大変な環境の中ではありますが、研修医の先生たちも社会人としての自覚を持ち、日々頑張っておりまして研修をしております。

2021年6月には地域自治体からの要望もあり、新型コロナウイルスワクチンの接種者として小豆島町での接種研修を行いました。全国的に接種の担い手不足が問題となっていた時期でした。当センター研修医に意向調査を行ったところ、積極的に地域に貢献したいとの希望があり、スキルスラボでのシミュレーション学習を行った上で、実際に小豆島での集団接種に臨みました。これらシミュレーション学習や接種の様子は、多くの取材をいただいたため、目にくださった讃樹會会員の皆様もおられたかと思います(写真)。香川大学医学部附属病院が地域に必要とされる病院として活動すること、また地域で自分たちが主体的に関わった予防接種が、地域住民から直接感謝されるというとても貴重な経験となりました。

医師臨床研修マッチングの全国的な傾向として、研修医の臨床研修病院指向が強くなっております。大学病院での研修者は全体の40%以下となり、特に地方大学においてはその傾向が強いと感じています。当卒後臨床研修センターにおいても、新型コロナウイルス感染症流行後のマッチング者数は2021年度22名、2022年度22名と厳しい状況です。香川県の地域医療に貢献できる人材を輩出したいと思っております。讃樹會会員の皆様におかれましても病棟実習生や研修医を見かけた際には、積極的なお声がけをいただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



写真：小豆島町での新型コロナウイルスワクチン接種と取材の様子

「児童問題研究会ひばり」が内閣府特命担当大臣表彰を受賞しました 2021/12/17

内閣府では、地域における子どもや若者の社会貢献活動において顕著な功績のあった個人又は団体を、「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」として内閣総理大臣および内閣府特命担当大臣から表彰しています。この度香川大学医学部サークル「児童問題研究会ひばり」が、昭和58年設立以来行っている、発達に困難さを抱える子ども達へのボランティア活動、入院中の子ども達への学習支援等の社会貢献活動が認められ、内閣府特命担当大臣表彰を受賞しました。

【部長 医学科4年 寺島凜太郎さんのコメント】

(写真 前列左から2人目)

この度は、児童問題研究会ひばり(現『ひばり』。以下ひばりと記す)が、内閣府より『未来をつくる若者 オブ・ザ・イヤー』を受賞し、またそれをこのような場に掲載していただけるということで、非常に喜ばしく、ありがたく思います。

ひばりは、発達に困難を抱える子どもや、長期入院を必要とする子ども、その家族と交流し、支援するとともに、その経験を将来の医療者として役立てていくことを目的に、昭和58年に設立された医学部のボランティアサークルです。

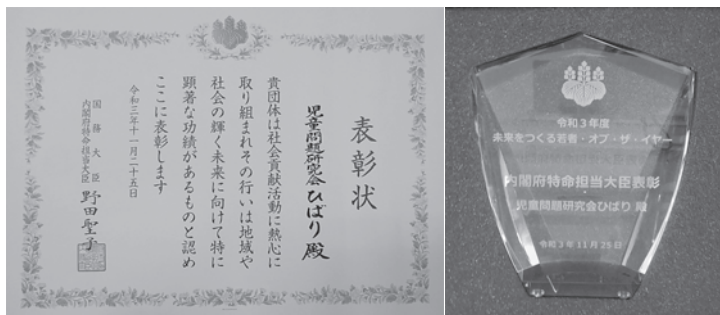
以来、時代に合わせて様々な活動を行ってきました。現在では、高松平和病院において、障がいを抱える子どもと月に1度交流する「おひさま教室」と、慢性疾患などで長期入院が必要な子どもや、その家族と交流する「小児病棟ボランティア」の2つを主な活動内容としています。

しかしながら、昨今の新型コロナウイルスの影響で、いずれの活動も大きく制限されてしまいました。自分が代表を務めさせていただいた2020年からの2年で、「おひさま教室」は1度だけしかひばりとして参加することはできませんでした。また「小児病棟ボランティア」についても、zoomを活用したりなど、非対面での交流が主となってしまいました。

自分としても、想定していた活動ができず、またせっかく入ってくれた部員にもなかなかサークル活動を経験させてあげられないことを、非常にもどかしく、心苦しく思ってきました。

ですが、そうした中でも、このような表彰をしていただけというのは、今までの活動の積み重ねがあつてのことだと思います。自分達としても、この表彰を励みに、コロナ禍、そしてそれ以降においても、より一層精進し、様々なことを学び、積み重ねて行きたいです。

最後になりますが、これまで活動を続けてきていただいた部員の皆様、活動にご協力いただいた病院関係者やスタッフの方々、交流をしてきてくれた子どもたちやそのご家族、また讃樹会の皆様、その他ひばりに関わってくださった全ての方に、心よりお礼申し上げます。



— 子どもたちの明るい未来のために、私たちと子どもたちが共に成長する —

KAGAWA UNIVERSITY

香川大学医学部ボランティアサークル
児童問題研究会 ひばり

- 発達に困難さを抱える子どもを支える
自閉症などの発達に困難さを抱える子どもたちを対象にボランティアとして、運動会や手まり等の多彩な活動を展開しています
2. 小児がんなどの慢性疾患を抱える子どもと社会をつなぐ
入院中の子ども達の学習支援や遊びのサポート
COVID-19対策として、2020年からはコミュニケーションロボットOriHime®を活用して、入院中の子どもたちと水族館をつなきました
3. 子どもの育ちを地域で支える
地域の児童サービスセンターのスタッフの補助等を通して、子どもたちの日常生活をサポートしています

これらの活動を通して、学び、将来、自分たちが医療者・教育者となる自覚を強めています

香川大学医学部サークル 児童問題研究会ひばり 基本情報

- ✓ 設立年度：昭和58年(1983年)
- ✓ 設立目的：本会は児童に関する現代が分る諸問題について、学術的に研究・調査を行うとともに、更にボランティア活動を通して児童の福祉の発展に貢献することを目的とする。(会則1条)
- ✓ 会員(令和3年6月現在)：医学科生17名、看護学科生24名、心理学科生14名

香川大学医学部学生が「えほん大賞」を受賞！

2021/10/11

医学部医学科4年次生土岐菜月さんが作・絵ともに制作した絵本「おキモチヤ」が、第19回えほん大賞（文芸社出版）において応募総数約2700作品の中から最高位である絵本部門の大賞に選ばれました。

第19回えほん大賞ホームページ

<https://www.bungeisha.co.jp/ehon/result19.jsp>

【土岐菜月さんコメント】

はじめまして。医学科4年の土岐菜月です。今回このような場を設けていただき、心より感謝申し上げます。文芸社の第19回えほん大賞絵本部門にて大賞を受賞し、2021年6月より私の書いた絵本が発売されました。2670通の応募があったそうで、自分でも驚きなのですが、友達や先輩後輩、家族、今まで私に関わってくださった方々がみんなすごく喜んでくれて、私も嬉しいです。いま中国や韓国で日本の児童書翻訳が盛んみたいで、いつになるか分かりませんが韓国語版、中国語版のオファーも各国の出版社からいただき、文芸社さんが案件を進めてくれています。これだけ聞くとすごい気がするのですが、一方私は全然実感ないのと、目の前の課題や試験に追われて、部活も始まって、人ごとのように感じる毎日です。内容は、見る人・見る時期によって、感じ方が違ったり浅くも深くも読めたらいいな、と思ってつくりました。少しでもほっこりしてもらえたり、クスッとしてもらえたら嬉しいです。たぶん期待しないで読むくらいがちょうどいいと思います。もし読んでもらえて、どこかで私を見かけたら感想教えてください。では勉強頑張ります！



令和3年(2021年)度研究助成金/研究奨励金 受賞の言葉

研究助成金部門

日本大学医学部
機能形態学系 生体構造医学分野

平井 宗一 (平成14年卒・17期生)



この度は香川大学医学部同窓会・讃樹會より令和3年度研究助成金を賜りました事、大変光栄に存じます。平川会長をはじめ同窓の先生方に深く感謝いたします。また、御審査頂きました諸先生方に、この場をお借りいたしまして深く御礼申し上げます。

本研究テーマである「代謝産物解析を用いた生体ガス分子による高圧気相保存法の開発」のきっかけは、私の香川医科大学在籍時まで遡ります。私は、6年生の選択実習を活用して、アメリカのWashington Universityに肺移植手術を見学する機会を頂きました。近隣の街にて、偶発的にドナーが発生し、目の前で移植手術を見学することが出来、大変感銘を受けました。一方で、最先端の移植医療では、最新鋭の機械が使用され、臓器が保存されていると想像していたのに対し、移植用臓器が保存液の入ったバケツに無造作に入れられ運ばれてきたのを見て、強い衝撃を受けたことを今でも覚えています。卒業後、麻酔・救急医学講座に入局し、酸素だけでなく、様々なガスの効果について実感をし、生理活性をもつガスに興味をもつようになりました。その後、大学院に進学し、同窓の先生方にお世話になりながら研究を行う過程で、生体ガス分子を活用した臓器保存法の開発のプロジェクトに出会いました。このように、香川医科大学の学生時代、麻酔科医時代、大学院時代の経験が、現在の研究に繋がっております。また、讃樹會の国外留学助成金を拝受し、Harvard Medical University, Massachusetts General HospitalのResearch fellowとして、生体ガス分子の代謝に関する研究に従事させて頂いた経験も、本研究に活かされております。

さて、今回の研究計画では、これまでの経験・結果に基づいて、生体内活性ガスを用いて保存した細胞・臓器の代謝を解析・評価すると同時に、代謝産物の測定・評価に基づいて、高圧気相保存法における生体内ガス分子の至適なガスの組み合わせを決定することを目的としております。将来的には、本研究を進展させ、臓器保存法の開発にとどまらず、再生医療における細胞状態の維持や、臓器培養技術へ応用していかたと考えております。

香川大学医学部同窓生として、本研究助成金を有効に活用させて頂きます。今後も、香川医科大学で得た経験をもとにして、移植医療に貢献できるよう取り組んでいきたいと考えております。最後になりましたが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

研究奨励金部門

香川大学医学部
消化器・神経内科

千代 大翔 (平成22年卒・25期生)



この度は令和3年度讃樹會研究奨励金に採択頂き、心より感謝申し上げます。讃樹會会員の先生方、関係者の方々、ならびに選考委員会の先生方には心より御礼申し上げます。私は平成22年に香川大学を卒業し、香川大学卒後臨床研修センターでの研修を経て、香川大学医学部消化器・神経内科に入局いたしました。平成24年からは関連病院の香川労災病院に出向し、一般内科、消化器内科として研鑽を積み、平成26年から大学に戻り消化管グループとして臨床や研究活動に励んでいます。

大学院に入学後、当科正木教授の指導の元、基礎研究として抗糖尿病薬メトホルミンが小腸癌への増殖抑制効果を示し、その増殖抑制に関し細胞周期G1期からS期への移行を抑制する機構が関与することを報告し、学位を取得することができました。その際並行してメトホルミンの影響を及ぼすターゲットmicroRNA(miRNA)の同定を行ったことをきっかけとして、miRNAと腫瘍との関連に可能性を感じ、早期大腸癌に特異的なmicroRNAの同定とその機能解析を開始しました。

miRNAとは21-25塩基長の1本鎖RNA分子であり、その標的mRNAに対して不完全な相同性をもって結合し、標的mRNAを不安定化するとともに翻訳抑制を行うことでタンパク質産生を抑制することで、様々な病態に影響を与えていると考えられます。miRNAは腫瘍に特異的なものが同定されれば新たなバイオマーカーとなる可能性があり、また腫瘍の増殖に関与するmiRNAが同定されれば新規抗癌剤などの新たな治療法開発の手がかりとなることも期待されています。さらにmiRNAの研究は、将来的には癌のみならず、さまざまな疾病の診断、治療、創薬開発を目指したバイオ産業の基盤技術となる可能性を秘めています。

当科で専門的に行っている早期食道癌、胃癌、大腸癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)は、当科の強みの一つですが、ESDの適応となるような早期病変に特異的に発現するmiRNAについては十分理解が進んでいません。現在いくつかの有力なmiRNA分子を同定しており、その機能解析を進めています。ESDサンプルを使用した本研究は新たな知見を得るとともに、当大学のアピールに繋がるものと考え、引き続き尽力していきたいと思っております。引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

讚樹會研究助成金／研究奨励金 2022年度募集要項

1. 研究助成の目的

学内外で活躍している同窓生の行っている研究活動をサポートし、それらの社会への還元を促進すること。

2. 助成対象者

研究助成金：香川大学医学部(旧香川医科大学)医学科同窓会の会員で卒後25年以内の者で申請時より遡って5年間(準会員期間を含む)の会費を納入している者。

研究奨励金：香川大学医学部(旧香川医科大学)医学科同窓会の会員で卒後15年以内の者で申請時より遡って5年間(準会員期間を含む)の会費を納入している者。

尚、両者を同時に応募することはできない。

研究助成金は、1回受賞した後はインターバルを3年置いて再度申請が出来る。

研究奨励金は、1回の受賞をもってその後の申請は出来ないこととする。

3. 助成期間 1年間

4. 助成金額

研究助成金：1,000千円以内を1名。

研究奨励金：500千円以内を1名。

5. 選考方法 外部評価者による厳正な審査を経て、讚樹會理事会で決定する。

6. 研究成果の報告義務

(1) 研究助成を受けた方は、助成研究の結果(助成研究報告書)と研究助成金の使途明細(助成研究会計報告)を、助成2年後の2024年9月1日までに提出する。

(2) 助成研究の成果を助成研究発表会で発表する(日時・形式については別途連絡)。

(3) 助成研究の成果は、原則として学術誌に投稿すると共に、別刷一部を提出する。

(4) 過去において助成された事績がある応募者は、その助成課題に対して学術誌に投稿(受理を含む)しておれば、別刷一部を添付。ただし、既に提出済みの別刷はその必要はない。論文に讚樹會への謝辞が記載されていないものについては、受け付けない。

(5) 以上の報告義務を怠った場合には、助成金の返却を求める場合がある。

尚、やむを得ず申請者が手続きを完了できない場合には、共同研究者によってすべての報告が代行されるものとする。またこのような事が生じた場合は、総合的な責任は推薦者に発生するものとする。

7. 2022年度申請手続き

(1) 申請書 讚樹會所定の申請書「第1号～第8号様式」を書面で「書留便」などの確実な方法で提出のこと。提出部数は原本各1部、複写各4部。

(2) 受付期間 2022年2月1日～2022年5月6日(締切日必着)。

(3) 提出先 〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
香川大学医学部医学科同窓会讚樹會 担当 柚山
TEL・FAX：087-840-2291 E-mail：mddousou@kagawa-u.ac.jp
URL：https://dousokai.site/sanjukai/

8. 選考結果の通知・公表

結果は文書で本人に通知する(2022年8月の予定)とともに、会報に受賞者による謝辞を掲載する。尚、提出書類は返却しない。

9. 守秘に関する留意点

特許、守秘義務を交わした協同研究である等の理由で守秘が必要な場合は、上項6. 研究成果の報告義務及び8. 選考結果の通知・公表について勘案し、申請者の自己責任において応募すること。



放射線治療棟新設

香川大学医学部附属病院 放射線治療科 助教
高橋 重雄 (平成21年卒・24期生)

この度は讃樹會の先生方に新放射線治療棟をご紹介する機会をいただき、誠にありがとうございます。

香川大学放射線治療科は、2012年1月の活動開始以来、「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げ、2014年度に導入した高精度治療対応の照射装置（リニアック）を用いて、強度変調放射線治療（IMRT）・画像誘導放射線治療（IGRT）・定位照射（いわゆるピンポイント照射）等に積極的に取り組み、前

立腺癌や頭頸部腫瘍だけでなく、脳腫瘍や子宮頸癌に対するIMRTの実績を増やしています。

一方、2008年に導入された古いリニアックが高精度治療にほとんど対応しておらず、機能強化の足かせとなっておりましたが、病院の予算の都合でロードマップから遅れはしたものの、はれて新型に更新していただくことになりました。その更新に伴う好影響を図1にお示しします。

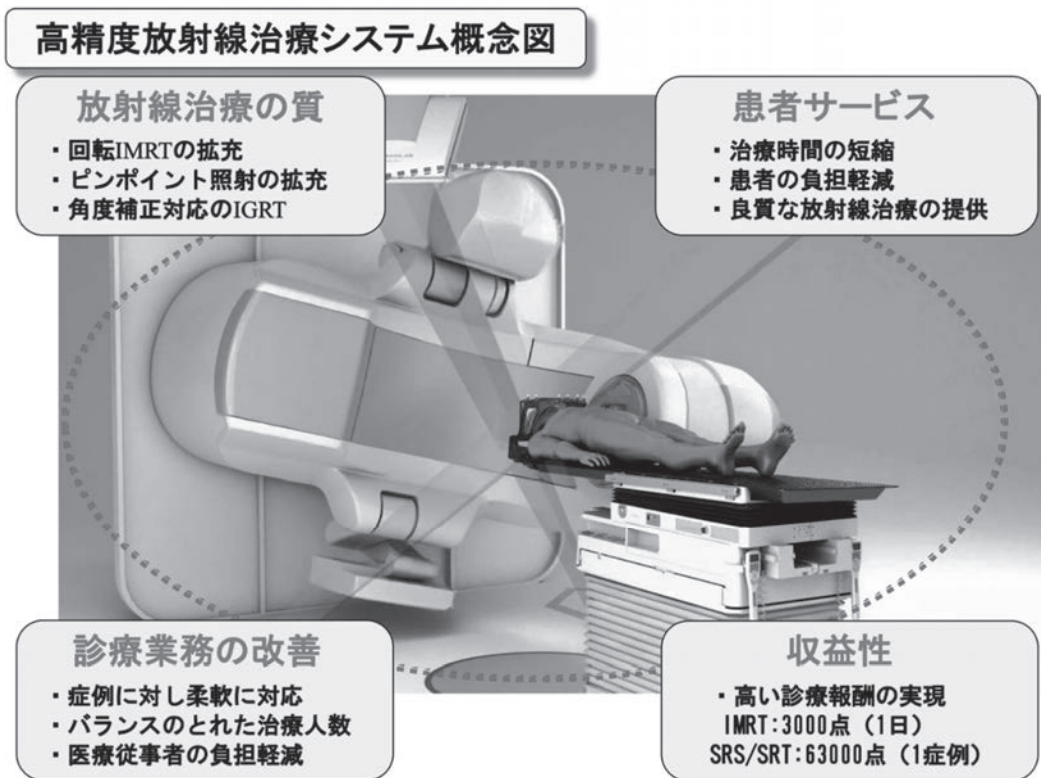


図1：新型リニアックにおける高精度放射線治療システム概念図（当院放射線部 續木主任診療放射線技師からご提供いただいた）

これまでの「高精度機1台+旧型機1台」の運用が「高精度機2台」に進化するため、IMRTや定位照射の症例を増やすことができます。このおかげで、これまで当院であまり提供できていなかった「肺癌へのIMRT」や「転移性脳腫瘍（脳転移）への定位照射」を行えるようになるため、がん診療連携拠点病院としての責務をより一層果たせるようになります。

さて、新型リニアックを据え付けるにあたり、建屋の問題が出てきました。現放射線治療棟（昭和59年竣工）は約40年前の設計で狭く、2008年の古いリニアックの導入時でさえ、改修が必要な状態でした。同じ部屋に新型リニアックを入れるには、更に大幅な改修を余儀なくされるどころでしたが、関係各所と議論を重ね、紆余曲折を経て、放射線治療棟が新設されることになりました。決め手として、(1) 新設によって、古いリニアックを稼働したまま、新型リニアックを設置できる（大幅改修では、古いリニアックを止めた状態での入れ替えになるため、残り1台で全ての患者を照射し続けることになり、スタッフ・機器への負担が多くなる）、(2) 2014年導入のリニアックもいずれ更新する時期が来るが、新設であれば(1)と同様にスムーズに稼働できる（新設でなければ、(1)と同じ大幅改修の悩みが再燃することになる）が挙げられると思います。

次に、新設する場所の問題が出てきました。今後もX線による放射線治療の歴史が続く限り、定期的リニアックを更新していくことになるため、新型リニ

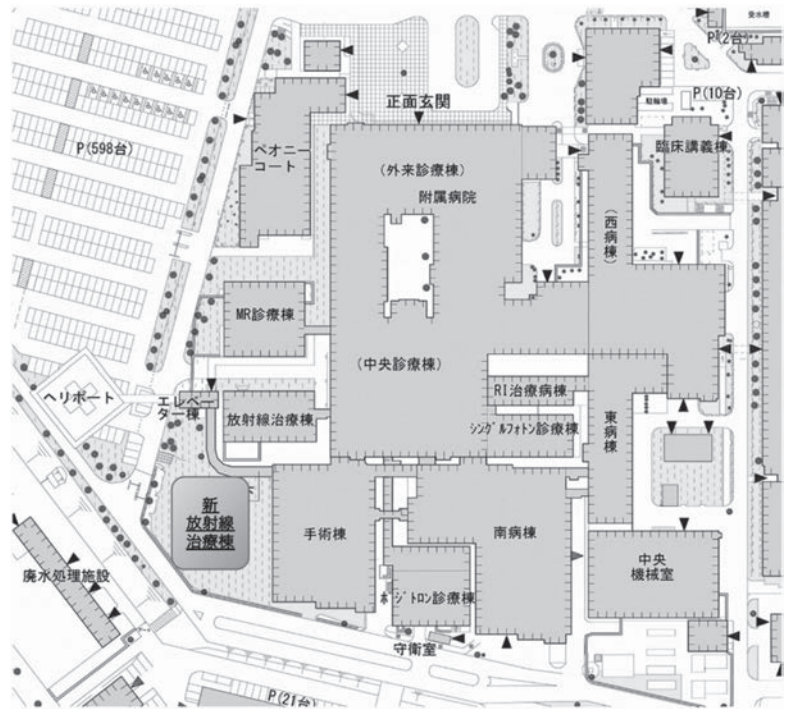


図2：新放射線治療棟の場所
(当院ホームページ「病棟案内図」から改変して引用した)

アックが2台入ることを必須要件とし、将来的な装置のサイズ変化も想定した上で、現実的な広さの建屋を新設する必要があります。一方、病院の敷地面積や予算は限られているため、こちらも紆余曲折を経て、図2の通り、手術棟南隣に、ヘリポートへの渡り廊下に接続する形で建設されることになりました。

最後に、本稿執筆時点の建設状況を図3-5にお示しします。



図3：新放射線治療棟（東側から筆者撮影）



図4：新放射線治療棟（南西側から筆者撮影）



図5：新放射線治療棟（入口から筆者撮影）

予算の都合から、1期目の工事として、今回更新する新型リニアックの稼働に関連する部分が建設されました。将来的に（2014年に導入されたリニアックを更新する際に）、2期目の工事を経て、フルスペックの新放射線治療棟が完成することになります。

リニアックを据え付ける治療室に加え、3つの診察室、（子宮頸癌患者用の）内診室、患者面談室、操作室が今回の1期工事分で建設されました。

2022年5月からの臨床使用の開始に向けて、鋭意工事が進められています。

まとめになりますが、新型リニアックが稼働した暁には、より多くの患者さんにIMRTや定位照射等の高精度治療を提供し、これまで以上に当院のキャッチフレーズである『ささえる、つながる、リードする』を実践していきたいと思っております。讃樹會の先生方、当院各科関係者の先生方におかれましては、今後ご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

想定外のことだらけの人生 ～もうドクヘリなんてしない～

救命救急センター

切詰 和孝 (平成19年卒・22期生)



冒頭から大変申し訳ありませんが、私には文才もなければ語彙も少なく、このような文章を書くこと自体本来やってはイケナイことなので、内容や表現が不快なものになることを、どうかご容赦くださいませ。

表題にもありますが、私のこれまでの医者人生は想定外のことだらけでした。

それは医学部入学前に遡ります。一度も校内の試験や全国模試でいい成績をとったことがない自分が、奇跡的にセンター試験(現 共通試験)で高得点を叩き出し、調子に乗って某有名国立大学の医学部を受験したものの当然不合格。まあ、そうだよなど、ダメもとで受けた香川医科大学(現 香川大学医学部)の後期試験で奇跡的に当時興味があった事柄についての小論文が出題され、奇跡的に合格したのでした。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、それから私はとても怠惰な学生生活を送り、1年長めに勉強させていただいた後、どうにかこうにか医師免許を取得することができました。

そんな学生時代を送ったものですから、当然QOLを重視しやすい診療科に入るものと、周りも自分も考えておりました。しかしながら、蓋を開けてみれば最終的に入局先として選択したのは現在の救命救急センターでした(救急のQOLが低いわけではないです)。自分には絶対に向いていないであろうと思われた、急性期の緊迫した環境での命のやり取りをする仕事。その中でも特に緊急性や重症度ともに高く、迅速で適切な判断を必要とする「外傷」という分野に不思議とのめり込んでいきました。

当時の当院の外傷診療は、お世辞にもレベルの高いものとは言えず、悔しい思いを何度もしたものでした。そこから更に火がつき、外傷の初期診療から、根本手術、集中治療にわたりシームレスな診療ができるようになりたい、と思うようになりました。それから救急専門医、集中治療専門医を取得した後、科長の黒田教授のご配慮で8・9年目に神奈川県で外科、10・11年目に大阪府で外傷の研修に行かせていただきました。実はここでも「想定外」のことだらけで、腕の良いと評判だった指導医の先生が次々に異動になったり、ノーマークだった新しく来た若手の先生が更に凄腕だったり、とても尊敬できる恩師や同僚に出会えたり、と忙しくも非常に充実した研修を受けることができました。

ただ、この研修中に得た最も大きなものは技術や知識ではなく、現場でのコミュニケーションの大切さ、でした(これも「想定外」)。

そんなこんなで2018年から再び当院の救命センターで働かせていただくことになったわけですが、それから「想定外」のことは続いていて、脳死のこと、県下メディカルコントロールのこと、など研修医の時には自分がやるなんて考えもしなかったような仕事もさせていただけのようになりました。そんな中、私の今の最大の悩みの種である「香川県ドクターヘリ」の立ち上げを任せていただくことになりました。これがまた非常に厄介で、何が厄介かというと、①香川県メディカルコントロールの問題(不応需など)、②院内の救急医療体制への理解の温度差の問題、③スタッフの経験値の問題、④2つの基地病院間で運用する問題、などなど「想定外」だらけ(挙げ始めるとキリがない、、、苦笑)。こんな状況で、ドクターヘリを立ち上げ運用していくことがどんなに難しいことか(伝わらないと思いますが)、毎日痛感しております。正直、こんな心を削るような状況は投げ出して、自分のやりたいことだけができる場所に行きたい、という気持ちもありましたが、こんな私にも慕ってくれる後輩たちやスタッフがいてくれました。

今、私は「想定外」にも、そんな仲間たちのためにこの状況をなんとかしたい、ここで働きたいと思えるような環境を作って行きたい、と思うようになって(しまっ)ていました。

正直、不思議です。患者さんのため、地域のためとはもちろん(それなりに)思うのですが、病院のためとか医局のためとか、そんな気持ちではなく(嘘ですよ?)、ただ慕ってくれる後輩や仲間のために、という思いです。

思い返せば、これらの「想定外」な様々なことは、型にはまりたくない、という自分の天邪鬼な生き方に合っていたのかも知れません。

ですので、多分、これからもそんな「想定外」を楽しみながら、自分らしく、一人の医師として生きてまいるのだと思っています。

もうドクヘリなんてしないなんて言わないよゼッタイ(すみません)



『私のキャリア』 ケーススタディ Vol. 1

はじめに

『医師の2024年問題』という言葉聞いたことがありますか。2019年に施行された「働き方改革関連法」に伴い、医師の『働き方改革』は2024年4月から施行される予定です。

実際、日本の医療提供体制が医師の献身的な努力で支えられてきたと言っても過言ではありませんが、そもそも『働き方』はライフスタイルと密接に関連します。医師としての存在意義や責任感と、自分自身の人生との調和をどう保つかで、悩んだことがある医師は男女問わず少なくないでしょう。

このコーナーでは、医療を取り巻く環境が変わりゆくなかで、卒業生の皆様が個々に抱える悩みや課題をどのように乗り越えてきたか、その経緯や打開策等を幅広く紹介させて頂きたいと考えています。

皆様のキャリアアップの参考として、自分らしく働き続けるためのヒント探しの一助となることを願っています。初回は、大学勤務の女性医師にお話を伺いました。



40代女性・夫・子供二人・地方都市在住・大学勤務（小児科）



▼ キャリア年表

卒年	WORK	LIFE
卒後1年目	香川医科大学医学部卒業 某大学大学院入学	
卒後2年目	某大学医学部小児科入局、大学病院で研修	
卒後4年目	県外の関連病院で常勤勤務、大学院との両立困難	大学院卒業 病気1発症
卒後5年目	大学病院勤務	
卒後8年目	助教	軽快
卒後9年目	小児科専門医取得	
卒後12年目	県外の専門病院へ国内留学	
卒後13年目	大学病院勤務にもどる サブスペシャリティ1の専門医取得	婚約、入籍、夫とは別居
卒後14年目		夫と同居、病気2発症
卒後15年目	サブスペシャリティ2の認定医取得	長男出産
卒後16年目	常勤医として復帰	
卒後18年目		次男出産
卒後19年目	常勤医として復帰	

▼ Q&A

- Q. 卒業時に抱いていた自身のキャリアはどのようなものでしたか？
- A. 体力もやる気もあり、大学院にすすみ研究や海外留学をしてみたいと考えていました。
- Q. これまでで困難を感じた時期はいつですか？またそれは何故ですか？
- A. 卒後4年目で病気をして、初めて長期の休みをとったり仕事のペースを落としたりしたときです。休むことに罪悪感を感じましたし、自分の状況を受け入れるのに時間がかかりました。まだほとんど貯金もなく、復帰の目処がたつまで生活面でも不安でした。
- Q. どのようにして、その困難を乗り越えましたか？
- A. 医局に相談したところすぐに働き方を配慮してもらえて、十分回復するまで待つて下さいました。回復途中にも、私が焦らないように取り組みやすい仕事からさせてもらいました。経済的にはまだ仕事をしていた実家の親に頼りました。
- Q. やっておいて良かったこと、取得しておいて良かったスキルや資格などがあれば教えてください。
- A. 国内留学の際にはそれまでの貯金があり困りませんでした。大学から補助もあり安心して生活できました。また、産後復帰した際にはサブスペシャリティのスキルを身につけていたのでそれを診療の場に還元することで夜間や休日の勤務ができない罪悪感が少し減りました。また、それまでに少しずつ論文を書いていたことで各方面の先生から声をかけてもらい、仕事がしやすくなりました。
- Q. 現在の悩みや不満なことがあれば教えてください。
- A. 自分の時間がとりにくいことが悩みです。子どもが寝ている朝方に起きて勉強などをしますが持病もあり、体力がもたずに思うようにすまないことにストレスを感じることがあります。また、疲れて体調や精神面が不安定なときには子どもにやさしくできずに罪悪感を感じます。
- Q. 今後の抱負などあればお聞かせ下さい。
- A. 焦らないように、でも立ち止まらないように少しずつ前にすすんで仕事を続けていけたらと思います。

▼ 学生・研修医へのアドバイスなど

卒業したころの私は幸い健康で、自分が努力さえすればなんでもできると考えていました。しかし病気や家族の介護、家庭の事情等で仕事をペースダウンせざるを得ないタイミングは男女問わず誰にでもやってきます。こうあらねばならない、という考え方にとらわれるとがんじがらめになって苦しくなってしまいます。自分が困ったとき周りに助けを求めることは恥ずかしいことではありません。その代わりに、自分が助けになれるときには相手に寛容になりサポートする事で自分も成長できると思います。

//// 第9回 ////

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3491人となり、約1000名が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後35年が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2021年10月20日に香川県立中央病院にお伺いし、河内正光院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

香川県立中央病院のご紹介

病院長 河内 正光



香川県立中央病院外観

讃樹會の皆様、日頃は大変お世話になっております。この場をお借りしまして、御礼申し上げます。さて、令和3年10月20日、讃樹會名誉会長の濱本龍七郎先生が来院されました。濱本先生とお話をさせていただくとともに、当院で勤務されている香川大学の卒業生も参加してお話しする機会が持てました。また、記念撮影も行うことが出来、大変楽しい時間を過ごさせていただきました。

ここで、香川県立中央病院の紹介をさせていただきます。

香川県立中央病院は、昭和20年日本医療団高松病院として開設され、昭和23年に香川県に移管され、香川県立中央病院として病床数30床にて発足しました。爾来総合病院として認可され、さらには臨床研修指定病院及び香川医科大学関連教育病院の指定を受けるとともに、腎センター、未熟児センター、救命救急センターと次々と開設し、病床数も631床へと整備拡充され、昭和56年には重篤患者の救命治療を専門的に行う24時間診療体制の三次救急医療施設として救命センターを開設し、県の中核病院としての体制を確立しました。

そして、平成26年3月に現在の朝日町の海沿いの地区に、検診センターを統合した施設として新設移転致しました。この後も、平成29年には第1種感染症指定医療機関となり、2床の感染症病床が加わり、平成30年にはHCU(12床)を開設、令和元年には緩和ケア病棟全床(15床)稼働となり、令和2年には地域がん診療拠点病院(高度型)の指定を受けるなど更なる県民の要請に応え、香川県の基幹病院としての体制を整え、現在に至っています。令和3年12月現在では33診療科、病床数533床(一般526床、結核5床、感染症病床2床)、救急病床としてはICU 10、HCU 12、救命病棟24の届け出病床となっています。(人員などの点から実際の稼働はICU 8、HCU 8、救命20で行っています。)

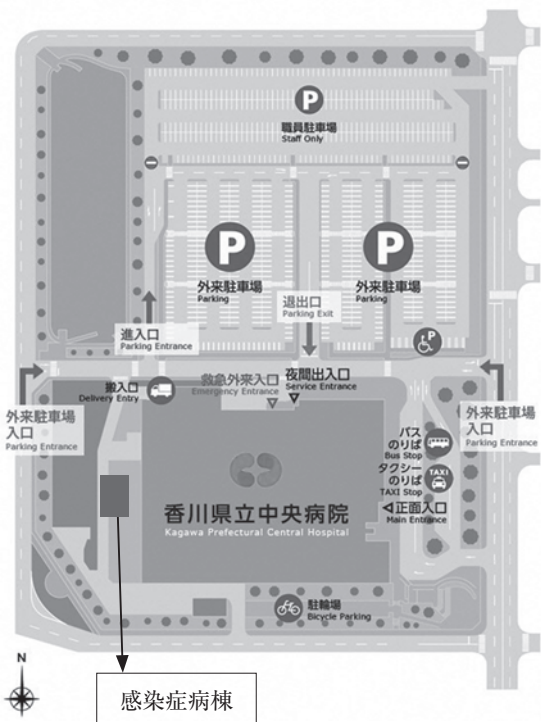
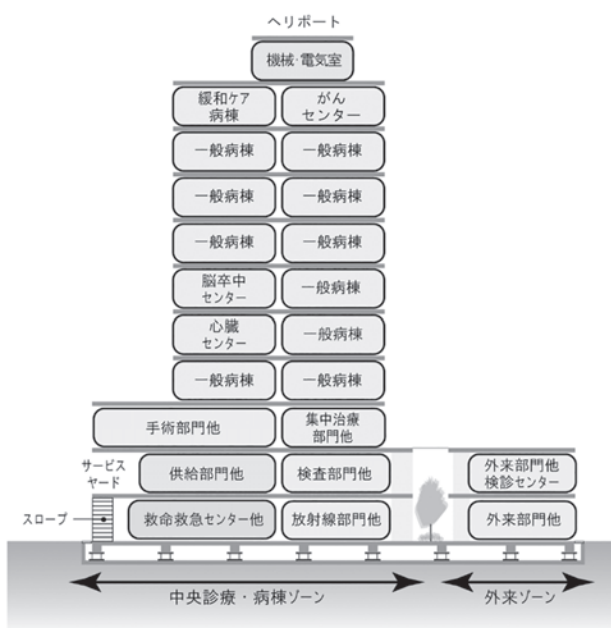


現在の病院の広さは45,000m²、免震構造をとっており、津波に備えた防災池を北西側に配置し、周囲道路には液状化対策が施されています。地上11階建て、1-2階は外来、ER、放射線部、検査部、検診センター、リハビリテーション部、腎センター通院治療センターなどからなり、3階には西側にICU、HCU、救命センターなどの救急・重症部門と手術室が配せられ、東側に医局、事務部門が置かれています。4階から10階は病室となっており、令和元年に開いた緩和ケア病棟は10階東に15床要しており、その北側には美しい屋上庭園の広がりを見ることが出来ます。屋上はヘリポートがあり、新病院開設時より防災ヘリによる患者搬送の起点となっています。

開設以来多くの施設認定を受けていますが、主なものとして地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院(高度型)、がんゲノム医療連携病院、救命救急センター、第1種及び第2種感染症指定期間、災害拠点病院(基幹災害医療センター)、へき地医療拠点病院、などがありますが、合計では現在34の指定医療機関となっています。また学会等の施設認定としては76に上っています。

現在の職員数は、医師は213人(うち非常勤61人、パート21人)、歯科医師7人(パート1人)、看護師706人、事務その他職員215人、医療技術系職員196人で、総勢1337人を擁しています。(平成31年4月1日現在)

病院が目指すものとしては、県の基幹病院として、急速に病態が変化する患者を対象にした急性期医療に機能特化しています。そして、高度医療を必要とする患者を医療機関から紹介を受け、治療するとともに、複数診療科にわたる特に高度な処置が必要な重篤患者への三次救急医療に重点化しています。また、災害時医療やへき地医療も行っています。このため、医療スタッフの増員、新しい医療機器の導入、チーム医療充実のための専門医療センターの新設を常に行っており、これからも、引き続き「最適・最善・最新の医療」を



当院の見取り図

提供し、県民と共に歩む県立病院を目指しています。当院の各診療科・部門は香川県の医療をけん引する意気込みで当院の理念である「香川県の中核病院として安全・安心な医療を提供し、県民や地域医療機関から信頼される病院を目指すこと」の実践に真摯に取り組んでいます。ここではその中から当院に特徴的ないくつかの例を紹介します。

各医療専門センターにおける診療

内科系・外科系の専門医のほか、放射線・検査・薬剤などの医療技術スタッフが一体となってチーム医療にあたる専門医療センターを設置しています。

心臓センターは心筋梗塞や大動脈解離など、急死につながる患者を対象とし、脳卒中センターは、脳出血・脳梗塞・くも膜下出血など、急死や重篤な後遺症になる患者を対象にします。がんセンターは、外科的な切除手術を行えないがんや白血病患者を対象として、抗がん剤治療や骨髄移植などを行います。また、新病院に移転する際に高松市郷東町にあった検診センターの機能を統合することで、検診から治療まで、一貫した迅速な対応が可能となりました。

がん治療（診断から手術、放射線化学療法、がんゲノム、緩和ケア医療まで）

当院で進めている高度医療の一つとして、がん医療が挙げられますが、診断から手術、放射線治療、化学療法から緩和ケア治療まで、一貫して先進的な技術、知識の獲得とその実践に努めています。診断・治療に関わる医療機器についても最新のPetCT、MRI（2台）、CT（3台）を運用、手術についてはロボット支援手術、鏡視下手術を多くの診療科（消化器外科、呼吸器外科、泌尿器科、婦人科など）で行っています。手術数については令和元年におけるがん以外の手術も含む総手術数は6200件を超え、令和2年はコロナ禍で減少しましたが5300件となっています。放射線治療についても、ノバリスTx（高精度放射線治療システム）によるIMRTや、リニアックによる放射線治療は年間6700件に上ります。化学療法については通院治療センターにおいて年間8500例に上り、年ごとに増加している状況です。

また、がんゲノム医療連携病院に平成30年に指定され、遺伝子カウンセリング、プロファイリングなどを行うとともに、遺伝子変異の解析に基づいたテーラーメイドの診療を行うことが可能となり、最近では例えばBRCA遺伝子を持つがん患者の手術も行うことができるようになってきています。

また緩和ケア病床をもつことにより、がんの診断から最終治療まで一貫した診療が可能となり、院外からも多くの紹介をいただいたくようになってきています。

内視鏡治療からロボット支援手術まで

消化器内科における内視鏡処置、手術においてはEMS、ESDなど四国内の施設の中でも有数の症例数を数え、内視鏡関連の検査・処置数は年間1万2千件を超えています。また、消化器外科では上部、下部消化器ともにロボット支援手術を積極的に進めており、ロボット支援手術の占める症例数は全国でも上位となっており、手術の低侵襲化と、若い医師の教育推進に貢献しています。

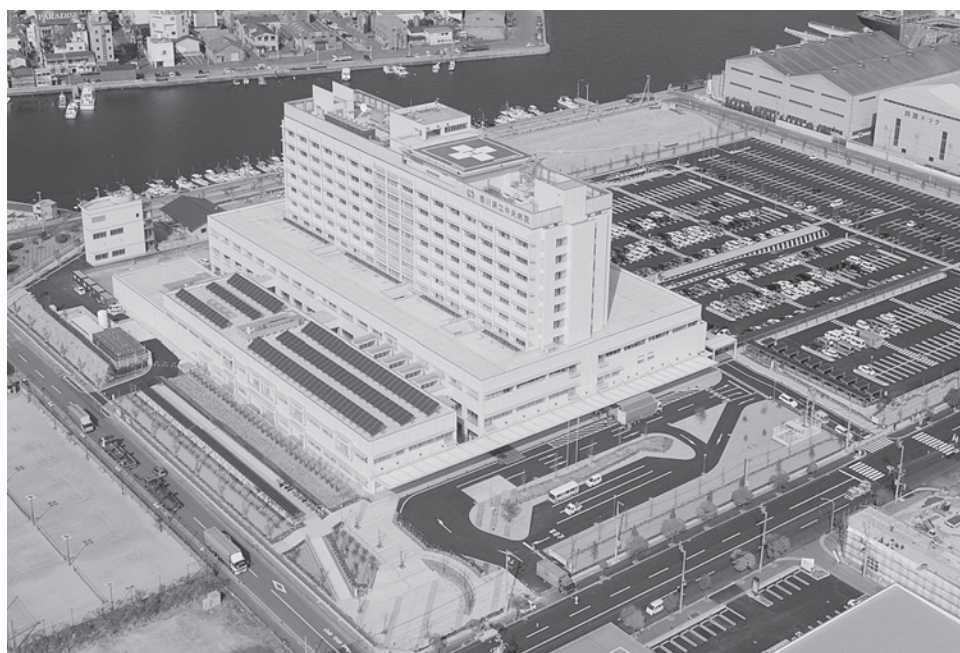
高度医療機器と先進的治療への応用

脳血管撮影装置は、ハイブリッド手術室と合わせて4台を整備し、循環器内科、心臓血管外科、脳神経外科などが、それぞれPCI、TAVI、ablation、大動脈瘤のstent治療、脳血管内治療を行うばかりでなく、整形外科では低侵襲脊椎手術などフラットパネルを用いた術中CTとしても使用しており、今後ますます先進医療への取り組みなどの応用が広がるものと考えています。

一方、救急医療については救命救急センターをもち、重症者用も含めた救急ベッドはICU 8、HCU 8、救命病棟20床の計36床と県下で最大級のベッド数で運用していますが、実際の救急診療には一次から三次までの救急患者をみており、初期研修医の教育にも貢献しています。令和元年には年間3700台を超える救急車搬入と、3741人の救急入院患者数となっていますが、その70%以上が中等症あるいは重症患者です。

また、令和4年度からはドクターヘリの基地病院となる予定で、重症患者受け入れ数のさらなる増加が予想され、本年8月には救命病棟の改装を行い、その準備を進めているところです。

香川大学からは多くの人材を派遣頂き、感謝に堪えません。現在当院で勤務頂いている医師を下記に記載していますが、当院はどの科でも多くの症例を診療しており、若い先生方には十分な研修ができる環境が



当院を上空より遠望

整っているものと思います。そのほか毎年初期研修先として多くの医師に当院を選んでいただき、一緒に診療に勤しみ、研鑽に励んでいます。初期研修の後、専攻医として残って仕事を一緒にして頂く方も最近が増えてきております。香川大学からの先生方のご協力には大変感謝しております。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

以上、病院の簡単な紹介をさせて頂きましたが、当院は総合病院としてすべての診療科をもっており、症例も県下一の実績を誇る科が多数あり、非常に充実した研修ができるのではないかと思います。今後とも、香川大学卒業生の讃樹會同窓会会員の先生方の御協力と御支援をよろしくお願ひ申し上げます。

また、讃樹會同窓会名誉会長の濱本龍七郎先生におかれましては、お忙しい所当院までご来院くださりありがとうございます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



香川県立中央病院に勤務されている香川大学医学部卒業生
(令和3年12月1日現在)

(麻酔科) 井上 一由 (H6卒)

(眼科) 小林 守 (H19卒)

(消化器内科)

香川 朋 (H25卒)、西尾 綾乃 (H29卒)、
平野 佑一 (H29卒)

(血液内科)

川上 公宏 (S62卒)、脇 正人 (H2卒)、
奥 真紀 (H22卒)

(呼吸器内科)

宮脇 裕史 (S63卒)、上田 裕 (H7卒)

(腎臓・膠原病内科) 平石 宗之 (H5卒)

(緩和ケア内科) 原 一平 (H2卒)

(消化器・一般外科) 松本 真琴 (H31卒)

(循環器内科)

大河 啓介 (H14卒)、鶴川 聡子 (H17卒)、

岡田 知明 (H17卒)、尾崎 正知 (H20卒)

岡 明宏 (H23卒)、津島 龍 (H26卒)

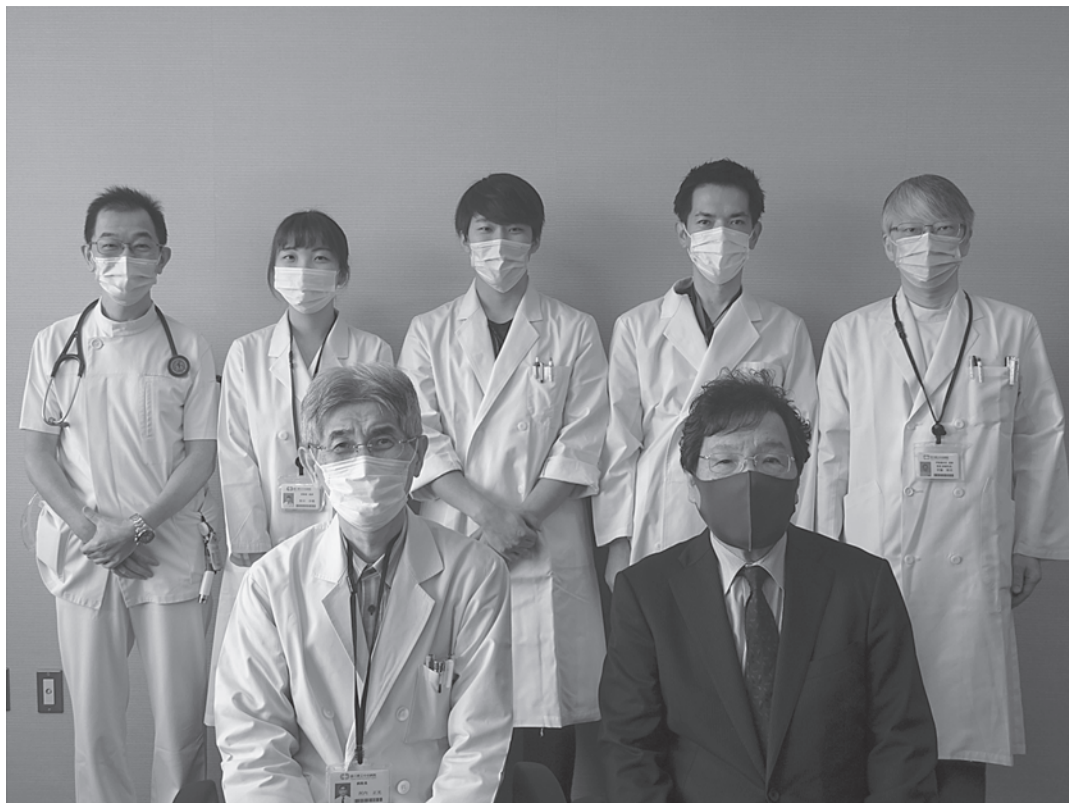
(小児科) 川本 昌平 (H23卒)、松原 満理 (H29卒)

(整形外科) 久保田 耕作 (H28卒)

(皮膚科)

細川 洋一郎 (H20卒)、河野 淳子 (H24卒)

合計24人の医師がそれぞれの診療科にて懸命に診療を行い、病院へ多くの貢献を行っていただいています。



前列左より	河内正光 院長、濱本龍七郎 讃樹會名誉会長
後列左より	
川上公宏	副院長・血液腫瘍内科部長
柴田幸穂	17期研修医
中西健太郎	17期研修医
山内 豊	18期研修医
宮脇裕史	呼吸器内科部長

書籍紹介

『昭和わたしの証言V』

西岡 幹夫
山崎 敏範 編著

西岡、山崎先生の近著を読む

香川医科大学西岡幹夫名誉教授と香川大学山崎敏範名誉教授が編集した「昭和わたしの証言 V」が昨年8月、発刊(美巧社)されました。本著は「昭和わたしの証言」シリーズの第5巻で、第2次世界大戦前後、戦後の動乱、高度成長時代など昭和期の体験を綴ったものです。今までに延べ77名の執筆者が自分史的に、現在社会が忘れかけている過去の事例について述べ、香川大学医学部からも、病理の大森正樹、精神科の細川 清、泌尿器科の竹中生昌、内科の西岡幹夫の各先生が執筆しています。

今回は香川県内外の女性6名を含む26名が執筆し、大学教官、元教師、企業役員、主婦など幅広い人物の証言があります。香川大医学部に以前勤務された病理の阪本晴彦、放射線科の佐藤 功、脳神経外科の長尾省吾、内科の水重克文、西岡幹夫の各先生の名も見えます。

編者らは我が国の昭和期を検証し、未来を考える縁となればうれしいと述べています。讃樹會の皆さんには本著をご一読頂きたく、紹介致します。

本書(1,650円)のお問い合わせは美巧社(087-833-5811)、高松市多賀町です。

讃樹會名誉会長 濱本龍七郎



支部会・懇親会

繋がり続けることを力に変えて

— 讃樹會関東支部会オンライン同窓会 —

関東支部会支部会長 内山 順造
(平成3年卒・6期生)



11月20日と26日の両日に渡って讃樹會関東支部オンライン同窓会が行われました。11月26日にオミクロン株が南アフリカで発生したことを考えると「唯一のリアル同窓会のチャンスだったかな〜。」と今、思いますが、それまで開かれていた横浜Hotel New Grandでの同窓会をするかどうかの決定は、COVID-19第5波の真ただ中、やむを得ない判断でした。しかし、オンライン同窓会にはリアル同窓会にはない利点があります。みんな普段着です(笑)。晩御飯の鍋の準備をしながら参加のツワモノ(姫路市市長・清元先輩)、ペットのワンちゃんと参加する先生(村松明子先生)、勤務先からの移動のタクシーから参加してくれる先生(川田真宏先生)などなど、忙しい日々の中で、全国から地域を選ばず、ちょっとした隙間時間で繋がれたことに「with COVID-19時代の同窓会」は苦肉の策以上の意味があると感じました。参加者の先生方には、心より感謝するとともに、是非、お仲間を誘って次回の参加もお願い致します。

私が讃樹會関東支部会のまとめ役を仰せつかったのはコロナ禍前の2018年、それまで5年間Hotel New Grandの山下公園を見下ろす「スターライトルーム」の間で関東支部会を仕切ってこられた伊藤理先生(3期生)が、今年は仕切るのが難しいので誰かいないか?と伊藤正裕先生に相談され、伊藤正裕先生が「6期の内山先生」と推薦されたのがきっかけです。私で良いのかと、迷う暇はありませんでした。「了解です。」と即答したのには理由があります。

遠い昔のことになりますが、我々が卒業した当時、関東地方には、香川大学医学部(旧・香川医大)の卒業生は数えるほどしかいなかった。その我々に声をかけ、集めてエールを送り合って頑張ろう、と讃樹會関東支部会を作り、毎年、声掛けして下さったのが、初代関東支部会会長伊藤正裕先生、2代目江藤誠司先生そして、3代目の伊藤理先生でした。特に印象的だったのは伊藤理先生が、Hotel New Grandの受付に

開場30分前から立
たれ、三々五々集
まってくるちょっ
と緊張気味の卒業

生たちに分け隔てなく、とろける様な笑顔で「良くいらっしやいました。」と声をかけ続けてくれたこと。その笑顔に毎年癒され、「今年も行こうかな。」という気持ちになったものです。その伊藤理先生がALS(筋萎縮性側索硬化症)を発症された。にもかかわらず、「スターライトルーム」の受付には毎年、9期で奥様の伊藤美奈子先生に付き添われた伊藤理先生の姿がありました。理先生にとって香川大学医学部の卒業生は皆、かわいい弟、妹だったので、あの優しくてオシャレな紳士で、決して泣き言を言わない伊藤理先生が、「もう、きつい。」と思われた時、迷う時間はないと思いました。ちゃんと会を開催して伊藤理先生に安心してもらわなければ。その年の会で伊藤理先生にお会いしたのが最後になりました。伊藤美奈子先生に「一緒にQueenの映画を観に行っただの。」と後から聞いたときには涙が止まらなかった。

翌年は、コロナ禍直前の開催でHotel New Grandで開催できませんでしたが、去年と今年はオンライン開催、それでも絶やさず続けることが大切なんだと、受付に立つ理先生の姿を思い浮かべながら思います。

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」史記にあるこの詩が、我々、6期生の卒業石碑に刻まれています。「小人物には大人物の考えや志がわからない。今は理解されずとも上を見て頑張れ。」の意です。

同級生の現副医学部長・日下隆先生が私の下宿に来て「何か良い言葉はないかな。」と聞かれ、父から送られたこの言葉を伝えると、同じ同級生の現医学部長の三木範崇先生が「それにしよう。」と決めてくれたのを覚えています。今や、「鴻鵠の志」を果たされた両氏に遠く関東からエールを送り続けたいと思います。どうかよろしくお願い致します。

内山支部会長



国外留学助成金留学レポート

東京女子医科大学 形成外科
橋本 一輝 (平成21年卒・24期生)



留学先：The University of Texas Medical Branch (UTMB), Galveston, TX, USA
留学期間：2019年5月～2021年4月

Old Red、テキサス大学医学部旧校舎

改めまして、香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」における国外留学助成金を拝受しましたこと、誠にありがとうございました。私は2019年5月から2021年4月までの2年間、米国テキサス州ガルベストンのThe University of Texas Medical Branch (UTMB) にて Postdoctoral fellow として研究生活を送ってまいりました。今回留学体験記を書く機会をいただきましたので、これから留学を志す若い先生方の一助となればと思い筆を執りました。

族ビザも含めてそれほど時間がかからないのですが(1～3ヶ月)、ことグリーンカード(永住権)となると1～2年はザラにかかることで当時は非常に焦りました。アメリカ移民局に手紙を送ったり、電話でやりとりしたりと留学直前まで心が折れそうな事務作業が続きましたがなんとか家族全員で渡米できる準備が整い2019年5月にテキサスへ向かうこととなりました。

留学まで～Preparation

私の所属する東京女子医科大学形成外科では北米への留学経験を持つ先輩方が多く、中でもテキサス大学は諸先輩方から脈々と受け継がれる留学先の一つでした。留学者の選出はほぼ教授の一存?で、ありがたいことに早い段階で留学の話をしていただきました。そういうわけで自ら留学先を探してアプローチしたり、給料交渉したりといった過程は一切なく留学先とのメールのやりとりで書類準備などを進めていきました。とはいえ書類準備には骨が折れました。特にVISA関連は非常にやっかいで、私の場合はアメリカ国籍があったため家族はグリーンカードを取得するのが前提で通常の研究者ビザ、家族ビザは発行できないという事態に陥ったのです。研究者ビザであれば家



Jenny Sealy Hospital、手前の白い建物がLabo

研究～Research experience at UTMB

UTMBのラボでは羊を使った大動物実験が主で、気道熱傷や広範囲熱傷研究、塩素ガス（毒ガス）による肺障害に対する治療薬の検証、敗血症に対するiPS細胞治療、創傷治癒研究など多岐にわたりました。ラボはボスとマネージャー、自分を含めたポスドク数人と8-10人程度のアシスタントスタッフで構成されていました。当時は帰国前のポスドクばかりで自分がほとんどの実験責任者を担っていたため、平日はほとんど夜間のオンコール業務（羊が危篤になった時に安楽死および解剖を行う）があり、一晩で3回（3頭の解剖）呼ばれラボで寝泊まりした時などは非常につらかったのを覚えています。私の主な仕事は羊の実験前手術（スワンガンツカテテルなど各種ライン挿入、気管切開、左房カテテル留置、リンパ管カテテル留置）および、実験、データまとめ、論文作成でした。日本の大学での仕事に比べて比較的時的余裕があったものの、予想していたより忙しいなと言うのが最初の印象でした。仕事に慣れてくると生活にも余裕が生まれ、金曜日は昼過ぎには仕事を終え帰宅してビールを片手に子供とプールで遊んだりできたので、そこはやはり日本での大学生活とは訳が違うと思い直しました。

生活～Life in Galveston

ガルベストンはテキサス州南部のメキシコ湾に面した島で、暑さと湿気に慣れれば快適な生活を送ることができました。もちろんアメリカならではの苦労は多く、日々悪戦苦闘していました。アパートの契約、車役所関係、子供の学校、習い事などなど、家族を抱えて移住するのはこれほど大変なのかと思知らされる毎日でした。とはいえ家族が居なければ遠くガルベストンの地で廃人のような生活を送っていたであろうことは容易に想像できるので、やはり家族が居てくれたからこそ留学を楽しみ思い出にできたのだと今は妻子に心から感謝しています。

コロナ禍～COVID-19 Pandemic

留学生活もようやく落ち着き、ロッキー山脈でスキー旅行を楽しんでいた矢先にラボの同室の中国人ポスドクから珍しく電話がかかってきました。空港が封鎖されて帰国できなくなるかも知れないから急いで帰国する、今までありがとう（謝謝）、と。当時はこれほど大事になるとは夢にも思っていなかった頃です。その後のアメリカの惨状は言うまでもありません。テキサス州でも感染者が激増し、ラボは閉鎖に追い込まれました。約1ヶ月半の間、在宅勤務となり、これはこれで楽しむしかない家で料理に勤しんだりバーベキューを研究したりと、それまで以上に家族と濃密な時間を過ごすことができました。余談ですが、テキサス州では「マスクをしていない人を咎めてはならない」という州法が成立したようです。自由の国アメリカ、独立精神を重んじるテキサスです。

留学を終えて～Next step

世界がワクチン接種に期待を寄せる中、ラボではやり残したことがたくさんありましたが後任に託してガルベストンに別れを告げ2021年4月にひっそりと帰国



NASA ヒューストン宇宙センターにて



ヒューストン自然科学博物館にて

しました。帰国後は2週間の自宅隔離、その後現職場の大学へ復帰しました。

留学中の研究成果は日々忙殺されながら今なお論文執筆に追われる毎日ですが、2年間遊び呆けていたと思われぬよう日々奮闘しています。

留学に興味のある若い先生方にはぜひ機会を得て挑戦して欲しいと思います。海外に赴き、知らない土地で新しい人と出会い、苦労をともにして過ごす経験は何にも代え難い財産になると思います。やったことがないことをやってみる、それだけでもとても意味のあることだと思うのです。

最後になりますが、香川大学医学部医学科同窓会「讚樹會」からのご支援をいただき、無事留学生活を終えることができました。この場をお借りして改めて深く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



帰国前にガルベストンで撮影

学生支援（競争的資金）活動報告

2021年度

讃樹會では、学生生活の活性・充実に資することを目的とした学生支援を行っています。採択は年間5件に限られます。このことにより、将来的な競争的資金獲得の練習の場となることも期待しています。(2022年度募集要項は讃樹會HPを参照下さい。)

香川大学学生ACLS勉強会

代表 医学科3年 河井 沙奈

香川大学ACLS勉強会は「大切な人が突然目の前で倒れてしまったとき、あなたにはいったい何ができますか？」をテーマに、心停止になった人と遭遇した時に救命処置を迅速かつ的確に行うことができるよう、日々知識や技術を学んでいます。また、自分たちが学ぶだけでなく、地域の方や他の医学部学生に対して講習会を開くことで誰にもできる一次救命処置を伝える活動をしてきました。

今年度はコロナウイルスの影響により、残念ながら対面での講習会は断念せざるを得ませんでした。しかし、対面での講習会の代わりとしまして初めてオンラインでの活動を行いました。オンラインの活動では医学部学生を対象とし、スライド発表を行ったり、一次救命処置を題材としたシナリオゲームを実施したりしました。救急に少しでも興味を持ってもらえるように工夫を凝らした内容となりました。

・スライド発表

医学部生を対象とし、一次救命処置についての説明、発展的な内容として二次救命処置に用いられる道具についての説明をオンライン上で行いました。二次救命処置についてはデモンストレーションの動画を作成し、動画を見てもらうことで実際の処置の様子がイメージしやすいようにしました。また、比較的身近に起こりうるケースとして餅の誤嚥が起こった時の一次救命処置、小児に対する一次救命処置について説明も行いました。

・一次救命処置を題材としたシナリオゲームの作成

シナリオゲームとは、与えられた選択肢の中から1つを選ぶことでストーリーが進んでいくパソコン上のゲームです。今回は一次救命処置について学ぶため、大切な人が倒れてしまうという場面を設定し、選択肢を順に選ぶことで救命を行うストーリーとしました。ストーリーの内容は自分の祖父や祖母が餅を誤嚥してしまった時、海で溺れてしまった小学生を発見した時の2本を用意しました。



今後の展望としましては、感染対策を行いながら、救命処置における手技の練習や対面での講習会を再開していきたいと考えています。さらに、今回のオンラインでの活動を踏まえ、さらに活動の幅を広げていきたいと思っています。

最後になりましたが、日頃の讃樹會のご支援並びにスキルラボでお世話になっております地域医療教育支援センターの皆様方に深く感謝申し上げます。

臨床推論勉強会

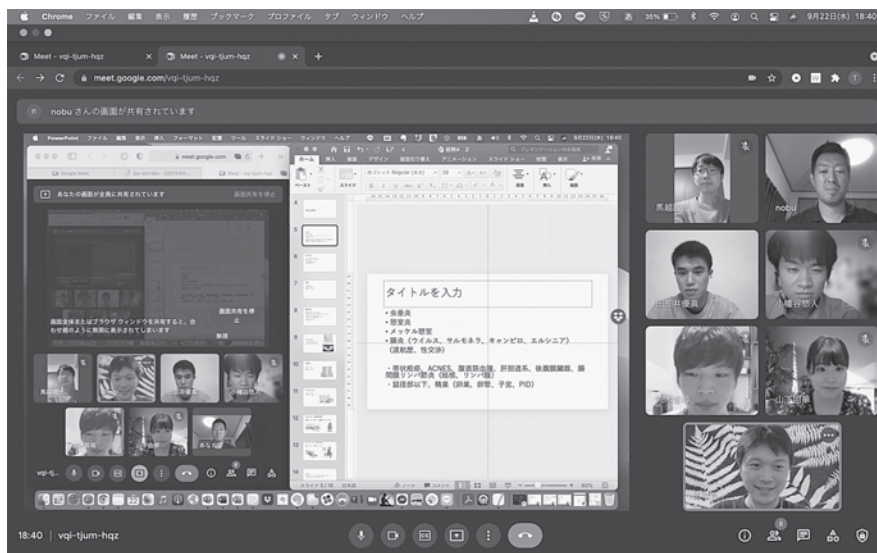
代表 医学科4年 氏原 英敏

この度は讃樹會からのご支援をいただき大変ありがとうございました。

私たち臨床推論勉強会は2021年3月より活動を開始しました。今回始まったこの勉強会はもともとこの春に卒業された先輩方の勉強会を発祥としています。この勉強会では現在外部講師として坂出市の回生病院から総合診療科の西信 俊宏先生をお招きし、臨床推論の基本を学んでいます。参加している学生は4年生を主体とし総勢17名で今年度はほとんどがオンラインでの勉強会となっております。

2020年に基礎医学の講義が終わり、臨床医学の講義が始まった私たちにとって現在まで続く新型コロナウイルス感染症の影響は大きなものとなりました。大学での直接対面形式で学べる機会や質問をする機会、学生同士が討論する場が少なくなってしまったのは大変残念でありました。現在のカリキュラムでは臨床医学の講義の中にPBLを行う機会があります。本来であれば直接学生同士が集い、香川大学附属病院の先生方のご指導を仰ぎながら与えられた課題に対し主体的に学んで行くことができるようになっております。しかし、そうした課題も現在はレポートの提出のみになり、学生同士で議論をする場が少なくなりました。この勉強会では実際に臨床現場で見られたCommon Diseaseの具体例について鑑別疾患を挙げながら診断までの過程を追体験していきます。月に1回の2時間ほどの短い時間の中ではありますが、今まで座学で学んでいたことを次々と想起していくことで、講義の中で強調されていたことや教科書での学びをより実際に近い形で見つめ直すことができました。勉強会に参加した学生からは普段の講義に対する意欲が向上したとの意見が出ており、今後こうした活動を広げていきたいと考えております。

そこで今回、讃樹會からのご支援をいただいたものを活用し、Zoomを用いたリモートでの学びを深めていきたいと思っております。リモートを活用することは、直接会うことはでき



ないながらも議論の場を設けるだけでなく、遠隔地とのやり取りをよりスムーズに行うことが可能となるといったメリットがあります。今後は香川大学を卒業された先輩方から学ぶ機会や他の大学との交流など、香川大学内の活動に留まらず勉強会の幅を広げていきたいと考えております。もし、私たち学生の活動をご支援していただくことができる先生は是非ご連絡をいただければと考えております。また、現在同じく学んでいる学生の方で興味を持っていただける方がいらっしゃいましたら同様にご連絡いただければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

編 集 後 記

2021年はコロナ禍が収束しないままの厳しい一年となりましたが、年が明けてもオミクロン株など予断を許さない日々が続いています。オミクロン株は日本でも急増しています。オミクロンはデルタと比較すると重症化しにくい可能性があります。しかし、感染者数が増加すれば、それに比例して入院を要する人、重症になる人は増えてしまいます。引き続き一人一人がマスク・手洗い・人混みをなるべく避けるなどの感染対策をしていくことが自分や周囲の人を守ることにつながります。

同窓生教授就任挨拶を、岡野先生と乾先生よりいただきました。讃樹會も、明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。さて、ニュースの窓では「医学部人事異動」「卒後臨床研修マッチング結果」「えほん大賞受賞」、「臨床実習開始式」「ひばりの内閣府特命担当大臣表彰受賞」が掲載されていますので、ご一読ください。

関連病院紹介では、近年同窓生が多く研修をしている香川県立中央病院を特集しています。同窓生が活躍している様子を伺えます。『私のキャリア』ケーススタディという新しい企画も始めました。救命救急センターの切詰先生や放射線治療科の高橋先生から各科の最近のトピックスについて寄稿いただきました。

スマートフォンの画面を見ながら久しぶりに“会う”孫に話しかける患者さん。「顔色いいね。元気そうでよかった」とビデオ通話しています。新型コロナウイルスの感染予防対策として面会しか許されていないので、スマホを使って面談していました。家族は元気そうな祖母の様子を見て安心はしたようですが、直接話したり、手を握ったりできないのはやはりさみしいとのこと。大学病院は、通常の面会解禁のめどはまだ立っていません。

今度こそ早期の感染終息を願いますが、年が明けて1月19日には香川県で100人以上、東京都内でも7000人近い新規感染がそれぞれ確認されています。感染拡大に歯止めが掛からない状況ですが、コロナウイルスが変異し進化するように、我々も新たな治療薬を獲得し、コロナウイルスへの理解も深まる中、我々が今度はコロナウイルスを凌駕するくらい変化していく必要があると考えます。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長 谷 丈二（平成14年卒・17期生）

事 務 局 か ら の お 知 ら せ

【連絡・問い合わせ先TEL 087-840-2291】

◆同窓会事務局のメールアドレスが変わりました。

2027年までは古いアドレスにメールした場合でも、新規のメールアドレスへ転送されますが、早めに同窓会事務局の新規アドレスをご登録下さい。

新アドレス mddousou@kagawa-u.ac.jp

◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。

◆国外留学助成金の募集は現在中止しています。

◆令和4年度研究助成金／研究奨励金の申込締切は5月6日です。ふるってご応募下さい。

◆日本赤十字社香川県支部の活動資金へのご協力をお願い

日本赤十字社香川県支部からのお願いを受け、会員の皆様に広く周知し、ご協力（寄附）を募ることとなりました。日本赤十字社への寄附には、税制上の優遇措置が認められています。詳細は同封チラシでご確認下さい。

訃 報

正会員

小林 宗則先生（平成13年卒・16期生）
2020年8月

藤木 通弘先生（昭和63年卒・3期生）
2021年10月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。